

十全同窓會會報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓會会報
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷(株)

(題字…佐藤保十全同窓會会長)

新年のご挨拶

十全同窓會会長 佐藤 保



会員の皆様、明けましておめでとうございます。今年は積年の懸案でありました創立百五十周年記念事業もその殆どをめでたく遂行し、あとはプロムナード整備を残すのみとなりました。改めて会員諸兄のご支援に感謝申し上げます。加えて同窓会の資金援助を得て、新医学図書館もめでたく竣工し、十全記念ホールや貴重資料室も立派に整備されて、これからの学術・情報活動の拠点となることが期待されます。

金沢大学では、中村学長の任期満了に伴う次期学長選考会議が行われ、副学長の山

崎光悦氏が選出されました。山崎新学長は、世界で活躍する人材の育成をめざして四学期制の導入や、地域の持続的な発展を図るため、新しい学問分野「持続可能性科学」の構築など、金大の特徴を生かした将来展望を述べておられます。その大学活動を支援する全学学友会も、前金沢市長・山出保氏を新会長に迎え、新しい役員のもとで金沢大学の活動を全面的に支持する体制が整えられました。二〇一五年春の北陸新幹線金沢開業とあいまって、金沢大学に大きな飛躍が齎されることを祈念します。

一方、学外に目を転じますと、わが国は東日本大震災を契機として、政治、経済、社会、外交、教育、資源などあらゆる分野で、戦後に発展・維持してきた体制の再検討を迫られています。その要因の一つは、戦後の日本社会を支えてきた団塊の世代が社会の第一線から退き、あらゆる分野で世代交代が進んだことです。これまで中心となっていた活動してきた指導層が体制の前面から退いたこ

とは計り知れない影響を及ぼしました。

もう一つの要因は、将来的な「二〇五五年問題」です。わが国の合計特殊出生率が現在の二・二六のままで推移すれば、五十五年には生まれてくる子どもが五十万人を切って現在の百万人の半分となり、日本の人口は九千万人になります。これは欧米も経験したことのない未曾有の高齢化社会で、六十五歳以上の高齢化率は四〇％を超えます。人口減、出生率減、高齢化上昇が同時に起こり、労働力人口の急速な減少で、現在の社会構造の維持は到底困難となりましょう。

無論、そうならないための施策を政府はいろいろ講じてはいます。「アベノミクス」で知られる政策は今のところ順調に推移しているように見受けられます。

しかし今後予想される八・一〇％の消費税増税が景気全体に及ぼす影響をもちますか、政府自身にも明らかではありません。小泉構造改革の結果引き起こされた格差社会は、社会生活に大きな歪みを齎しており、とくに若年層の将来に対する不安は社会制度の大きな不安定要因であります。

さらに高齢化が進む中で、民主党政府がなしえなかった医療・福祉制度の一体改革は、社会の安定化のために避けて通れませんが、こうした社会の根幹に係わる問題は、政府にお任せではなく、国民の声を結集しなければなりません。日本医師会を中心として医療関係者四十団体で結成した国民医療推進協議会が、現在わが国のあるべき医療・福祉について討議を重ねています。世界に誇るわが国の国民皆保険制度をはじめ、国民の生命と健康を守るため、最善の医療を提供する制度の実現に向けて努力されんことを祈ります。

目次

新年のご挨拶	1
就任挨拶	2
創立百五十周年記念事業の 進捗状況・秋の叙勲	4
受賞	5
学会報告	5
ホームカミングデー	6
論説	7
追悼文	8
病院紹介	12
教室だより	14
支部だより	16
クラス会	18
同窓生の消息	21
学生課外活動支援報告	22
金沢大学医学図書館記念 モノユメント除幕式	26
十全昔話	27
学生コーナー	29
教授退職記念講演会・記念式	30
編集後記	30

就任挨拶

山口 明夫教授

福井大学医学部長に就任



平成二十五年四月一日付で福井大学医学部長を拝命しました。私は昭和五十年に金沢大学を卒業後第二外科に入局し、消化器外科に関する臨床、研究の研鑽をさせていただきました。平成四年に福井医科大学第一外科助教授として赴任し、平成十年教授に就任しました。平成二十年より病院長を四年間務めました。今は医学部長として研究、教育や大学運営に携わっています。福井大学医学部は開設後三十三年になり、医学科、看護学科より多くの卒業生を輩出し、地域の福祉・医療に貢献してきました。今後もグローバル社会で活躍できる高度な専門性を備えた医療人の養成や世界レベルでの研究が行われるよう環境整備に努めるのが私の責務と考えています。現在二年後の国際基準に対応した医学教育認証評価の取得に向け、臨床実習の充実に取り組んでいます。福井県内の医療機関には多くの十全同窓会会員の方々がおられ、医療連携や本学学生の臨床実習などご協力いただいておりますが、今後も今まで以上のご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

ます。最後になりますが十全同窓会会員の皆様のご発展を祈念いたしますとともに

に、今後ともご指導、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

和田 有司教授

福井大学医学部付属病院長に就任



昨年四月に病院長を拝命し一年半余りが経過しましたので、病院の近況を紹介し挨拶とさせていただきます。今年で開院三十年の節目を迎えましたが、念願の病院再整備事業が昨年スタートし、第一期事業としての新病棟の工事も順調に進み、来春には完成予定です。新病棟では、臓器・疾患機能別センター化を中軸とし、最先端医療装置の設置、災害時のトリージング可能な仕様を取り入れることで、高度で安全な医療空間が提供できるものと期待しています。中央診療棟、外来の改修を含め再整備事業の完成は平成三十年の予定で、これにより「優れた地域医療人を輩出するハイクオリティー・

メディカルセンター」という再整備の理念が具現化することになります。医療の質のさらなる向上を目指していますが、とくに地域連携をさらに推進することが

地域医療の底上げにつながり、将来を担う医療人の育成に進展していくものと考えています。地域性と国際化は対峙するものでなく、地域に密着した医療を強化しつつ、その成果を基盤にグローバル化へとつなげて開花させることが不可欠であります。福井県内には多くの会員が活躍ですが、本院への県内外の先生方の一層のご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



松田 博史博士

国立精神・神経医療研究センター、脳病態統合イメージングセンター、センター長に就任



平成十六年四月よりの埼玉医科大学国際医療センター核医学科教授職を辞して、平成二十四年六月より

り、国立精神・神経医療研究センター(National Center of Neurology and Psychiatry; NCNP) 脳病態統合イメージングセンター(Integrative Brain Imaging Center; IBIC) センター長を拝命しています。昭和五十四年金沢大学卒業後、NCNPには以前にも十一年間、放射線診療部長として奉職していました。NCNPには、精神、神経、発達障害、筋疾患を統合的に診療可能な国内唯一の専門病院があり、かつ当該領域の研

藤本 学准教授

筑波大学医学医療系皮膚科教授に就任



や病院を越えて様々な先生方に大変にお世話になりました。この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。

筑波大学にも金沢大学に所縁のある先生が少なからずおられて、親しくお声をかけて頂き、金沢大学や十全同窓会の歴史の重みと人脈の豊富さを実感しております。今後は金沢大学で学ばせて頂きましたことを十分に生かして、つくばの地で新しい仲間とともに力をあわせ、よりよい診療・教育・研究を目指して全力を尽くす所存ですので、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、先生方ならびに金沢大学十全同窓会のますますのご発展を祈念しております。

金沢大学医学部十全同窓会の先生方におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。このたび二〇一三年十一月一日付で、筑波大学医学医療系皮膚科教授として転任することとなりました。金沢大学皮膚科には二〇〇五年三月に助教として着任して以来八年半にわたり在籍させて頂き、強皮症・皮膚筋炎などの膠原病や自己免疫疾患を中心とした診療・研究に従事して参りましたが、皮膚科の先生方はもちろんのこと診療科

城戸 照彦教授

ベトナム・ハノイ医科大学から名誉教授を再授与

(昭和五十四年卒業)

二〇〇九年ハノイ医科大学(HMU)第一号の名誉教授の称号(期間三年)を授与されました。今回、二〇一三年九月に新たに名誉教授(無期限)の称号をHinh学長より授与されました。

私は二〇〇二年からHMUのTo-80 Division(当時はOffice)と、「ダイオ

キシンの人体への健康影響について」共同研究を開始して十二年目になります。ダイオキシン類はベトナム戦争中に米軍によって散布された枯葉剤に含まれ、これが植生だけでなく生体への影響(発がん性、免疫異常、神経障害等)を引き起こすといわれていますが、ベトナム

研究所が併設された、日本では他に類を見ない臨床・研究施設です。平成二十三年四月、精神と神経の垣根を外した統合的基礎・臨床研究の推進に大きく貢献する目的で、IBICが設立されました。IBICはMRI、PET、MEG等の多

ムにおけるその実態は当時あまり知られていませんでした。そこで、ベトナム農村部での現地調査を毎年継続してきました。最近、ダイオキシンがいわゆる「環境ホルモン」の一種であることから、内分泌攪乱作用に焦点を当て、特に影響を受けやすい授乳中の母乳を対象に追跡調査を継続しています。その成果は、ダイオキシン国際会議で二〇〇六年以降毎年報告してきました。これらの共同調査・研究活動が評価されたのだと思います。

二〇一一年十一月に、金沢でワークショップをHinh学長はじめ多くのベトナム研究者や留学生の参加を得て開催しました。その際、金沢大学医学系の心臓外科の渡邊先生や大竹先生をご紹介し、その後、先生方がベトナムで心臓外科手術に貢献されている現況は交流の発展だと喜んでおります。

二〇一一年四月に、HMUの公衆衛生学部の開設記念講演会に招待され、ダイオキシン研究の報告ができたことも記憶に残るところです。

現在、私が指導する大学院生には四名の留学生がいます。内二名がベトナム人です。また、既に大学院を修了し、ベトナムで活躍している研究者や短期留学で受入れた研究者も数名います。今後とも、若手研究者の育成に努めていく所存

様な特性を持った先端的脳イメージングを有機的に組み合わせて統合的な脳病態イメージング研究をヒトおよび動物モデルにおいて推進しています。十全同窓会の諸先生方のご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

です。

発展途上国における国際共同研究なので、すべての費用を当方が負担しているのが実状です。幸い、学術振興会の科研費基盤(A)や(B)海外を継続的に獲得し、折々に民間助成の支援を受けながら実施してこれましたことに感謝しております。

今後ともHMUをはじめベトナムと金沢大学との交流が継続し発展するため、微力ですが、力を尽くす所存です。また、合わせて、十全同窓会の先生方のご支援を心よりお願いする次第であります。



創立百五十周年記念事業の進捗状況

百五十周年記念事業実行委員長・医学類長 山本 健

前号（十全同窓会会報百五十五号）の本欄で、本学医学部創立百五十周年記念事業として当初計画しておりました事業のうち、残っているのは「医学部記念館の改修工事」と「メインプロムナードの整備事業」の二つで、これらは予算規模から見ても桁違いに大きな事業であること、中村信一学長・古川侃副学長と金沢大学施設部のご尽力で、「記念館の改修工事」と「メインプロムナードの整備事業」を一体の事業として、平成二十六年

度文科省概算要求に申請されたことをご報告しました。次年度予算への要求です。高を括っていた所、平成二十五年十二月二十日（金）に開催された第百十二回教育研究評議会の席で、上記の事業が平成二十五年政府補正予算案に盛り込まれて閣議決定されたことが報告されました。「平成二十六年施設概算要求の前倒し」という性格の補正予算です。金額は本学ラジオアイソトープ実験施設改修費用との抱き合わせで示されているのはつきりしませんが、施設部の予想では約二億円が国からの予算として記念館とプロムナードの整備に充てられるだろうとのことです。皆さまから賜った募金と十全同窓会からのご寄付を合わせた一億円と、国からの二億円を合わせた約三億円が、「記念館の改修工事」＋「メイン

プロムナードの整備事業」に充当できる資金です。平成二十六年度概算請求には、複数の大学から本学と同様の施設整備要求が申請されたようですが、一億円の自己資金と、金沢市との協働事業（石引の広見と、医学部・病院前の側溝を一体化した遊歩道の整備事業）の組み合わせが評価されたことは間違いありません。これも偏に、十全同窓会会員各位のお力添えの賜です。

あと気掛かりなのは、東日本大震災復興のために土木工事の職人が東北に集中しており、本学の臨床研究棟を初めとする新規工事が軒並み遅れていることです。そのうちに東京オリンピックがらみの建設ラッシュが始まるでしょうから、百五十周年記念事業がいつ完成するのか、不透明な要素が残っています。それはさておき、本年二月に補正予算が正式に国会で承認されると、「記念館の改修工事」＋「メインプロムナードの整備事業」の具体的な工事が動き出します。特にプロムナード整備は、工事中の駐車スペースと完成後の駐車スペースの両面を考える必要があり、これまでに何度かご紹介した想像図（図）の通りにプロムナードから車両を完全に排除できるか、現実に即した設計図を引く必要があります。金沢市との協働事業（遊歩道の整備事業）は、市による現地の測量が終わり、

具体的な整備内容も提示されたようですが、金沢市の整備計画と大学の希望とは必ずしも一致せず、更に折衝が必要のようです。

記念事業実行委員長として新春に吉報をお届けできることを、心から喜んでおります。中村学長、古川理事、施設部各位、



十全同窓会会員各位に深甚の感謝を申し上げ、私からの締めくくりの進捗報告とさせていただきます。今春からは、次期医学類長が記念事業実行委員長に就任されます。創立百五十周年記念事業が有終の美を飾る日を、楽しみに待ちたいと存じます。

秋の叙勲

旭日中綬章

山下 公一
(昭和三十年卒業)

瑞宝中綬章

井村 愼一
(昭和三十二年卒業)

岡本 宏
(昭和三十九年卒業)

旭日双光章

津田 功雄
(昭和四十年卒業)

瑞宝双光章

奥村 雄外
(昭和四十二年卒業)

神谷 保男
(昭和二十五年卒業)

受賞

米国ピッツバーク大学で
Totten賞受賞

中沼 安二教授(形態機能病理学)

二〇一三年十一月十三日、本学医学系形態機能病理学(旧第二病理学) 中沼安二教授は、米国ピッツバーク大学医学部・メデイカルセンターで、Totten賞を受賞、Robert S. Totten客員教授に就任し、記念講演を行った。約二百名の聴衆を前に、「Biliary diseases with pancreatic counterparts-anatomical and pathological bases」の講演を一時行ない、講演後、活発な質疑応答があり、盛況であった。Totten賞は、ピッツバーク大学病理学Totten教授の偉大な功績を称え、一九七五年にピッツバーク大学で設立されたものであり、毎年一人、病理学の領域で最も活躍した研究者に授与され、受賞者が講演を行うものである。一九七六年には外科病理学の創始者であるAckerman教授、一九八九年には肝臓病理学のIsaacs教授、一九九八年には骨軟部腫瘍学のDorfman教授、二〇〇一年には脾病理学の権威であるHruban教授、など、米国の高名な病理学者が受賞している。今年度の中沼教授の受賞は、同教授の長年の肝臓、胆道の病理学の功績が米国で高く評価されたものであり、日本を含むアジア諸国では初めての受賞である。同教授の受賞を記念し、二〇一三年十一月二十八日、形態機能病理学教室主催の祝賀会が金沢市で盛大に行われた。

(佐藤 保則 記)

北國文化賞を受賞して

北陸がんプロ統括コーディネーター

並木 幹夫教授(集学的治療学)

この度、第六十七回北國文化賞を拝受し大変光栄に存じます。受賞理由は北陸がんプロの活動を通じての医療従事者の教育、一般市民に対する広報活動を評価いただいたとのことで、私個人ではなく、共にこの活動を行ってきた皆様が受賞したと理解しておりますので、関係の皆様と喜びを分かち合いたいと思います。

がんプロは、高度な知識・技術を有するがん専門医師及び医療従事者を養成するための優れた取り組みを補助する文部科学省の事業として平成十九年から始ま

日本医師会最高優功賞 受賞

中村 彰

西尾 功

平成二十五年十一月一日、日本医師会館で開催された第六十六回日本医師会設立記念医学大会で昭和三十四年卒業の中村彰(金沢市)、西尾功(奈良市)両氏が日本医師会最高優功賞を受賞した。最高優功賞の「医学、医療の研究又は地域における医療活動により、医学の発展又は社会福祉の向上に貢献し、特に功績顕著なる貢献者(都道府県医師会長推薦)」の部門で全国十三名の受賞者の中に、右記の十全同窓会会員同期二名が含まれていた。

りました。北陸地区では金沢大学を中心に、富山大学、金沢医科大学、福井大学、石川県立看護大学で運営され、北陸三県の全ての「がん診療連携拠点病院」に協力施設になっていたと思います。

プログラムの特色は、医師および医療従事者の融合型教育と、e-learningによる自由度の高い教育システムです。北陸がんプロの最も誇れる企画がテレビ会議システムを利用して二週毎に行われるキャンサードで、診療科、職種を越えた融合型教育の実践の場として全国的に高く評価されています。

一般市民に様々な情報を提供することにも力を入れてきました。ホームページ

学会報告

第四十三回

日本皮膚アレルギー・
接触皮膚炎学会総会学術大会

会長…竹原 和彦(金沢大学医薬保健研究域医学系皮膚科学教室)
会期…二〇一三年十一月二十九日～十二月一日
会場…ホテル日航金沢

二〇一三年十一月二十九日から十二月一日にかけて、ホテル日航金沢を会場に、第四十三回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会が開催されました。

には一日千件以上のアクセスがあり、市民公開講座も北陸三県で毎年約二十回行われ、多くの市民にご参加いただいています。金沢大学医学類の医学展を共催し、学部学生とも協力してがん啓発活動を行っています。

がんプロがスタートして七年以上経過しましたが、運営協議会には前述の五大学、がん診療連携拠点病院のみならず、石川県、富山県、福井県の厚生部、医師会、患者団体、マスコミなど多くの皆様にご参加いただき、大変感謝いたしております。がんプロ事業は金沢大学のリーダーシップが問われる事業かと思っています。十全同窓会諸兄はじめ、関係の皆様のご支援・ご指導を引き続きよろしくお願い申し上げます。

加水分解小麦入り石けんによる食物アレルギーやロッドデノール入り化粧品による白斑が社会問題化した昨今、皮膚のアレルギー疾患への関心が非常に高まっていることを反映してか、一般演題の登録数(一四五題)は予想を上回るものとなり、運営側としては身の引き締まる思いが致しました。幸い天候は晩秋の北陸としては穏やかで、交通機関の大きな乱れもなく、大会参加者は七百五十名にも登りました。



初日は会長挨拶を皮切りに、シンポジウムと一般演題の双方で活発な討論が始まりました。シンポジウムでは薬疹における免疫学の最先端かつ臨床に直結する研究についてご講演いただき、病態や治療の理解には基礎医学の知識は必携であると肝に銘じました。

二日目の特別講演ではTan教授 (Fielemmon K. Tan: University of Texas-Houston) が遺伝性自己免疫性皮膚疾患の最近の話題についてご講演されました。また教育講演では、村松正道教授 (金沢大学医薬保健研究域医学系分

子遺伝学) にB細胞の抗体産生について基礎から最新の研究までわかりやすく解説していただきました。

最終日となる三日目は、特別講演に谷内江昭宏教授 (金沢大学医薬保健研究域医学系小児科学)、教育講演に峰岸克行教授 (徳島大学疾患プロテオゲノム研究センター) をお招きしました。またアートルホールで行われた市民公開講座では、お二人の講師、金沢赤十字病院の川原繁先生と東京通信病院皮膚科の江藤隆史先生に、乾癬とアトピー性皮膚炎について基礎的なことから最新の治療にまで幅広く且つわかりやすくお話いただきました。

本学会は皮膚科学の奥深さを垣間見ることできた貴重な経験であったと同時に、その深淵を照らすためには日々の診療における具な観察と惜しみない努力が必要不可欠であると痛感した三日間でした。

学術的なことではありませんが、初冬の金沢まで足を運んで下さった会員の皆様に少しでも喜んでいただこうと、会長自らの発案で二日目の夜に饗された『北陸尽くし』の懇親会メニューは、非常に多くの方々にご出席いただき、十分に用意した料理の数々はものの一時間余りではほぼ完食となり、ご満足いただけたものと大変嬉しく、加えて北陸新幹線開業を一年半後に控えた金沢への誘客に多少なりとも貢献できたものと思いました。

最後に、本学術大会の開催に向けてご尽力いただきました関係各位の皆様によりお礼を申し上げます。

(実行委員・齋藤 佑希 記)

第七回 金沢大学ホームカミングデー開催

平成二十五年十一月二日(土)、本学角間キャンパスにおいて、第七回金沢大学ホームカミングデーを開催しました。歓迎式典には二百十四名、記念懇親交流会には百六十八名の卒業生およびそのご家族等にご出席いただき、大変賑やかな一日になりました。

歓迎式典では、金沢大学フィルハーモニー管弦楽団の伴奏と金沢大学合唱団の歌声に合わせて、式典出席者全員で校歌を斉唱しました。中村信一学長の歓迎挨拶、深山 彬金沢大学学友会会長の祝辞の後、本学の運営を支援し、特に貢献があった



歓迎式典で歓迎の挨拶を述べる中村信一学長

方々への感謝状贈呈、教育研究や課外活動等で優れた成果を挙げている教員・学生団体への表彰などを行いました。記念講演では、『クロネコヤマトの満足創造経営』と題し、ヤマト運輸株式会社代表取締役社長 山内雅喜氏(昭和五十九年文学部卒業)に、ヤマト運輸の経営理念や社員育成について講演をしていただきました。

記念式典終了後には、金沢大学学友会第三回役員総会も開催され、新会長に山出 保前金沢市長(昭和二十九年文学部卒業)が就任されました。

夕刻から開始した記念懇親交流会は、山出新会長の発声で乾杯し、楽しいひとときを過ごしました。会場では、本学薬草園で採れたハーブを使用した薬膳パスタや、金沢大学生協オリジナル日本酒が振る舞われました。途中、金沢大学マンドリンクラブの演奏や、卒業生有志による四高寮歌「北の都」「南下軍」の高唱もあり、大いに盛り上がり、最後は、歓迎式典で中村学長から感謝状が手渡された長田幸雄氏(昭和四十一年文学部卒業)の音頭による万歳三唱で会を締め、終了となりました。

次回、第八回金沢大学ホームカミングデーは、平成二十六年十一月一日(土)の開催を予定していますので、この前後日に同期生やサークル仲間のみなさまとの同窓会の開催をご計画いただき、懐かしい母校にぜひお越しください。

(学友支援室長 上地 進 記)

論 説

CITI Japanプロジェクト

医学系副系長 中尾 眞二

CITI (Collaborative Institutional Training Initiative) プログラムは医学研究者を対象とした医学研究倫理・行動規範教育のためのe-learning教材である。このプログラムは、二〇〇〇年四月にアメリカのボランテニア教員団体CITIが中心となつて作成され、その後世界中に利用が広がっている。その理由は、研究者倫理の欠如による医療・医学研究上の不正行為が後を絶たないためである。アメリカでは二〇一〇年からすべての生命科学系大学院生・指導教員などに対して、このプログラムを用いた行動規範に関する学習が義務化されており、現在その内容は医学研究倫理教育における世界標準となっている。また、アメリカ国内だけでなく、アメリカ国外の研究者が国立衛生研究所のような公的機関と共同研究を開始するためにはCITIプログラムの履修証明書が必須になっている。

CITI Japanの誕生

日本では研究者に対する倫理教育が著しく遅れている。臨床試験に関する最近のデータ改ざん報道などによって医学研究者による不正行為は一種の社会問題となっており、海外から日本の研究者に向けられる視線も厳しさを増しているのが現状である。このような日本の医学研究における倫理教育の遅れを取り戻すため、CITIと連携する「CITI Japan」が、文部科学省の大学間連携共同教育推進事業として平成二十四年に

立ち上げられた。現在では全国の医学系大学院八十七施設のうち四十施設以上が参加登録を終了している。金沢大学医薬保健研究域医学系と大学院医薬保健研究科医学博士課程においても、このCITI Japanプロジェクトに参加し生命倫理教育を実践することになった。

金沢大学での取り組み

平成二十五年十二月十八日には学内向けのCITI Japanプログラム説明会として、このプログラム作成のリーダーであるYamaguchi大学医学部小児科・内科学教授、信州大学特任教授の市川家園先生をお招きし、「研究者の行動規範に関する国際標準教育を目指すCITI Japanプロジェクト」と題する講演会が医学系運営委員会の主催で開催された。講演会では、CITIプログラムそのものの立ち上げに加わられた市川先生の苦労話や、日本から投稿された論文の撤回率（〇・七二）がアメリカ（〇・六）やイギリス（〇・一七）などに比べて高いことなどが紹介され、聴講者はこのプログラムの履修がいかに重要であるかを再認識した。日本では諸外国に比べて、幼少児から家庭内のしつけがしっかりしているため、社会人であれば既に倫理観が備わっているという思い込みがあることが、ミスマッチが多い一因ではないか、という市川先生のお話に身につきられるものがあった。金沢大学は既に参加登録を終了しており、受

講希望者は成績管理者（学生課長）を通して個人登録すれば、与えられたユーザー名、パスワードを用いて各自でログインし、履修が開始できるようになっている。

プログラムの内容

CITI JapanはCITIアメリカの翻訳版である。日本の実情や倫理指針に沿って改変したものである。必須の履修項目には「一、責任ある研究行為」「基盤編」として、「責任ある研究行為について」「科学分野のミスマッチ」「データの扱い」「盗用」「利益相反」「オーサリング」「ピアレビュー」「共同研究のルール」「メンタリング」「公的研究資金の取り扱い」の十項目、「二、人を対象とした研究」「基盤編」として「生命倫理学の歴史と原則、そしてルール作り」「IRBによる審査」「研究における個人情報扱い」「研究におけるインフォームド・コンセント」「特別な配慮を要する研究対象者」の五項目が含まれている。これらの必須単元（十五項目）には、理解が得られたことを確認するためのクイズがついており、正解率が八〇％以上であればその単元は修了となる。正解率が八〇％未満の場合にはその単元を繰り返して学習し、再度クイズに答える必要がある。一単元の学習とクイズへの回答には約三〇分かかるため、十五単元の学習に要する時間は計四五〇分である。研究者の立場に応じて、「人集団を対象としたゲノム研究」「カルテ等の診療記録を用いた研究」などのオプションを追加することができる。

大学院教育への導入

平成二十六年四月からの大学院博士課程入学者に対しては本プログラムの受講を必須とし、修了者に対しては少なくとも一単位が付与される予定である。一方、現在在学中の大学院生においても在学期間中であれば、上記の手続きを経て無料で本プログラムを履修することができる。前述のようにCITIプログラムの履修は、今後海外共同研究だけでなく海外留学の受け入れや研究助成金の申請などの様々な機会で見られるようになる可能性が高い。大学院修了後にプログラムを履修しようとする者も諸費用として六万円近くを支払う必要がある。このため、すべての大学院生はできるだけ早い時期にこのe-learningを修了することが勧められる。特に海外からの留学生のうち、平成二十六年度三月修了予定者については、外国人留学生向けに金沢大学が契約したアメリカCITIプログラムを履修することが望ましい。ただし、平成二十六年四月以降の修了予定者は、日本における研究指針などを加味したCITI Japanプログラムの英語版（二、責任ある研究行為・基盤編のみ）が現在作成中であるため、こちらを利用することが勧められる。

大学院生以外の教員・研究者の受講

CITI Japanプログラムは本来すべての医学研究者が履修すべきプログラムである。このため、大学院生以外の教員・研究者においても積極的な履修が望まれる。CITI Japanプログラムは国の事業であるため、平成二十八年度までは各研究・教育機関の登録・利用は無料である。その後は事業が外部に委託されるため有料となることが決まっている。実際にアメリカのCITIと契約した場合、施設の使用料として年間に二千五百ドルがかかる。大学院生以外の研究者が平成二十九年度以降にこのプログラムを履修しようとする、さらに費用がかかる可能性がある。このため早い時期にこのe-learningを履修しておくことが望ましい。

追悼文

廣根孝衛名誉教授追悼

血管新生・結合組織代謝学(皮膚科学) 竹原 和彦



泌尿器科学教室に入局されました。昭和三十四年十月に医学博士を授与され、同三十八年金沢大学助教授に着任。同四十一年二月から四十二年七月にかけて文部省在外研究員として米国アラバマ大学実験内分泌学教室に出張され、昭和四十九年九月金沢医科大学教授に転出、同五十五年四月に福代良一教授の後任として本学教授に着任されました。

廣根孝衛教授は初めメラノサイトの微細構造および色素顆粒の形成機序に関する電子顕微鏡的研究に着手し、その後メラノサイト系腫瘍である、母斑細胞母斑や悪性黒色腫の電子顕微鏡的研究、および臨床病理学的研究、表皮細胞の分化(角化)および角化異常の形態学的研究、自己免疫性水疱症の臨床的病理学的研究などに関する多数の優れた業績をあげ、天疱瘡のホルチンステロイド療法の標準化に貢献されました。本学教授就任後は表皮細胞に対する紫外線の細胞動態学作用に関する研究を推進し、皮膚疾患に対する紫外線治療の作用機序を明らかにしました。

なお、日本學術振興会と全米科学財団(NSF: National Science Foundation)の後援により昭和五十一年以降五回開催された表皮の分化に関する日米協力セミナーには毎回参加され、昭和六十年の第

四回セミナーでは日本側代表を務められました。

また、厚生省メラノーマ研究班の班員として悪性黒色腫の早期診断、予後因子の解析および進行期黒色腫の新治療法開発に寄与し、神経皮膚症候群調査研究班の班員として結節性硬化症やレックリングハウゼン病の病態生理の研究に貢献されました。

在任中は、昭和五十三年に第三回日本研究皮膚科学会と第二十九回日本皮膚科学会中部支部総会、同六十一年に第二回日本皮膚悪性腫瘍学会、平成元年に第八十八回日本皮膚科学会総会を主催されました。

これらの業績により、昭和三十六年五月に日本皮膚科学会から皆見賞、同五十九年六月に財団法人日本リディアオリリー協会から清寺真記念賞、同六十三年十一月に北國新聞社から北國文化賞を受賞されました。

平成四年から二年間、金沢大学医学部附属病院長として、附属病院の管理運営にも貢献され、平成六年三月に定年退職を迎えられ金沢大学名誉教授の称号を受けました。

その他、退職されるまでに神戸大学、岡山大学、富山医科大学、高知医科大学、東北大学、福井医科大学など、多くの

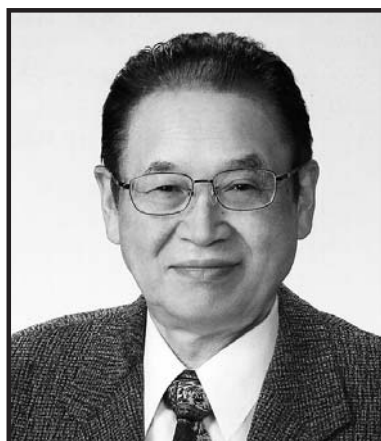
大学で非常勤講師を歴任され業績を上げられました。

私が初めて廣根先生にお会いしたのは平成六年の十一月のことで、金沢大学赴任直後に富山県魚津市にある富山労災病院に挨拶に伺った時です。お昼ご飯をご馳走になりましたが、教室の運営には一言も触れられずに淡々と「あなたが思うように教室を運営しなさい」と言っていました。心より廣根先生のご冥福を祈ります。



田中重徳名誉教授追悼

金沢大学医薬保健研究域保健学系 中谷 壽男



金沢大学名誉教授、前神経分布路形態・形成学(旧第二解剖学、現機能解剖学分野)教授田中重徳先生は、平成二十五年四月二十九日に逝去されました。享年六十九歳でした。

田中重徳先生は昭和十八年七月五日に長野県松本市にご誕生、県立松本深志高等学校をご卒業、昭和四十三年に東北大学医学部医学科を卒業され、昭和四十三年に岩手医科大学医学部解剖学講座の助手に就任、昭和四十五年東北大学医学部解剖学講座の助手に就任、昭和四十九年に東北大学より医学博士を授与、昭和五十年に秋田大学医学部解剖学講座の助教授に就任、昭和五十年より五十二年まで西ドイツのビュルツブルグ大学医学部解剖学教室のSchiebler教授の許に留学、帰国後昭和五十四年七月に医学部新設さ

れた琉球大学医学部解剖学講座の教授に就任、昭和六十二年七月に金沢大学医学部解剖学講座(第二)の教授に就任、平成二十一年に定年で退職されました。

先生は、肉眼解剖学の泰斗の浦良治先生の薫陶を親しく受けた極めてオーソドックスな解剖学者であり、ご遺体の中には謙虚に頭をたれた先生でした。

田中先生が退任記念誌に書かれた、退任にあつての回顧深謝をここに一部省略して転写します。この文章の中に先生ご自身の思いが込められていると思いますので、十全同窓会の会員の皆様に残り、先生のお人柄を偲んで頂けると幸いです。

『私の誕生の昭和中期では日本国は多難状況であり、国改善発展と優等人材育成に秀逸思惟教導をしてください。小生は昭和二十五年に小学校に入学してから大学卒業までの十八年間に於いて、偉大な指導を頂いた。

昭和四十二年では医師免許試験の事情変更となり、全国医学部の卒業生は初頭医師免許試験を拒否し、私も昭和四十三年発の初頭試験を拒否し、秋の次回試験にて合格、医師免許証受領は翌年の二月十四日となった。人体構造学教育の恩師(浦良治)が定年退官後に就任された岩手医科大学解剖学第一講座の助手に就任、「若者として、人体の三次元形態を学生にしっかりと教える知識と実習技術、そし

て研究技能を開発発展する」ことを指導して頂いた。解剖学実習献体をお受けする為に、実務担当職員と共に大学車で葬儀に参り、献体者家族と親族に解剖学実習献体の大切さを申し上げ、感謝致して受領致した。

昭和四十五年一月、卒業大学の解剖学講座の助手に就任させて頂き、昭和四十五年四月から八月末まで、東京医科歯科大学脳解剖学教授(萬年甫)の指導を賜り、脳の三次元形態と脳神経の起始から分布先までの三次元形態を教えて頂いた。ホシザメに於いての脊髄神経の比較解剖学研究をも行い、助手就任の四年後に医学博士の資格を得た。

昭和五十年一月に、秋田大学の医学部解剖学第一講座の助教授に就任、電子顕微鏡を教えて頂いた。昭和五十年九月にドイツ連邦共和国のWunzburger大学医学部解剖学教室に留学した。日本国とドイツ連邦共和国の奨学金を頂き、家内と長男と連れて行つた。ドイツ恩師教授(Schiebler)の指導・助成の研究成果をドイツ語で学会発表した。昭和五十二年夏に秋田大学に戻り、恩師が私の将来を配慮下さり、昭和五十四年七月の琉球大学医学部設置準備室に、医学部長が献体団体の琉球大学でいご会の発展の為に私を教授に就任させて頂き、県庁の総務部長と職員が献体団体発展の業務を真心遂行され、私も一緒に市町村役所に行き、篤志献体の大切さと法律を説明した。献体者の葬儀に大学事務員と共に毎回参席致し、拝礼し受領致した。昭和五十七年解剖学実習に於いて、学生に献体者と家族の心情をしっかりと教えた。翌年の解剖学実習に於いて、「あの献体のお体は私

のお祖父ちゃんです」という学生があり、お花を添えての解剖学実習に改革し、献体者と家族の皆様が衷心より感謝し、高邁情熱学習の勉勵を教導し、医師免許試験合格率を高めた。昭和五十八年五月二十五日、世界で初めての『医学と歯学の教育の為の献体に関する法律』が定められた。昭和六十二年七月に金沢大学医学部解剖学第二講座教授に就任させて頂き、しらゆり会の規則に従って業務遂行と解剖学教育・実習指導を行って来た。明治二十年の第四高等学校医学部からの大学墓地に六千名以上のお名前があり、家族が献体されている学生もおり、お花添えての謝恩解剖学実習を行っている。業務担当の方々にも感謝している。

肉眼解剖学の学問発展の為に、ハイデルベルク学派(比較解剖学、比較発生学)の流れを汲む一人として、板鰓類や両生類の脊髄神経と鰓弓神経の広範囲の三次元形態解明を進めた。ニワトリ胚とSmuggsを中心とする哺乳動物の胚、そしてヒト生体での末梢神経、神経堤細胞、心臓・筋節・血管の三次元形態の解明と肝臓・腎臓そのもの、若しくは関連構造での発生形態の残存を臍方向に向かつて解明し、解剖学講義と実習を改善発展し、論文作成と学会発表を行った。その際、中国と韓国の教授と教室員との連合を進展し、留学生を熱情指導致し、教授になつてゐる人もいます。『以上、原文のまま』先生はこの文章を読むと、自分のお体を大切にされ、手を抜かれれば、もっと長生きできたのではと思ひ残念ですが、肉眼解剖に全身全霊をそそいだ生き方には満足されていたかと思ひます。心より、ご冥福をお祈り申し上げます。

濱田潤一郎教授追悼

脳・脊髄機能制御学(脳神経外科科学) 林 裕



れました。

濱田先生は昭和二十九年、鹿児島県に生を享けられました。錦江湾を望む雄大な桜島が原風景であり、立派な体格も相まってまさに九州男児、薩摩隼人でした。風貌通りの大きなお心には勇気づけられ、一方で他人のことを細やかに思いやる繊細な一面には幾度となく救われました。

鹿児島ラ・サール高等学校在学時にはすでに職業としての脳神経外科医への思いが芽生えていたと聞きました。育まれた思いは、熊本大学医学部へ、更には角松康彦教授(故人)の主宰する脳神経外科教室への入局へとつながります。第二代教授の生塩之敬先生のもと、米川泰弘先生(後にマイクロサージェリーの泰斗Yatabe教授の後任としてNijmegen大学脳神経外科教授となられる)、橋本信夫先生(現国立循環器病研究センター理事長・総長)が部長を務める国立循環器病研究センター病院への内地留学を経て、医局長として熊本大学脳神経外科教室を支える一方、脳血管障害グループのチーフとして活躍されました。濱田先生は外科学の本質は手術学にあることを身を以て指導されてきました。が、深淵な手術哲学、卓越した技術は生塩先生、米川先生や橋本先生のもので育

まれたものでした。ここ数年、ご病気のせいで最も愛された手術の現場から少し距離を置かざるを得なかった心中は察するに余りあるものでした。普段は仕事をご自宅には持ち込まない先生が療養中は密かに卓上の手術顕微鏡をご自宅に持ち込まれマイクロサージェリーの感覚を取り戻そうとされていたことをお聞きし、外科医としての痛切な思いを拝察せずにはいられませんでした。

研究は常に臨床に基づき、次々と優れた論文を発表されました。熊本大学時代には頭蓋内疾患における腰部硬膜外圧測定の意義の解明、破裂椎骨解離性動脈瘤の後下小脳動脈分岐に基づく治療戦略の確立、くも膜下出血後の脳血管攣縮に対するマイクロカテーテルを用いたウロキナーゼの大槽投与法の開発など、臨床に根差した様々な画期的研究を行われました。

平成十七年五月、金沢大学医学部脳・脊髄機能制御学教授として当地に着任されましたが、当時の教室には教官は若い二名の助手のみで、まさにゼロからのスタートといっても過言ではない状態でした。そのような極めて厳しい条件の中、不撓不屈の精神で教室の再建に土日休日もなく尽力されました。濱田先生の滅私の姿に心打たれるかのように、次々と医局員が集まり、わずか数年内に年間約三百例の手術を行うまでの教室に育て上げられました。「ここ(石川県)に骨を埋める」との言葉は有言実行の言であり、正に当地を故郷のように思われ、県の医療体制の改善にも心血を注がれました。県と地域医療施設との協力のもと脳卒中の地域連携パスを確立されたのは、その思いの結果と考えられます。そのような

多忙な日々にあっても脳動脈瘤の血管内治療に用いる新たな塞栓物質の開発という、革新的な研究を続けられました。

医学生教育にも熱心に取り組みされました。平成二十年度より附属病院副院長の要職を務められ、更に多忙となられたにも関わらず、またここ数年体調がすぐれないことがあったにも関わらず、常に十分な準備をされて講義に望まれました。多くの医学生から濱田先生の講義を聴き、脳神経外科に興味を持ったということをお聞きしました。特徴的な九州弁も講義に花を添えたようです。

濱田先生は歴史に造詣が深く、「歴史を知ることは昔のことを懐かしむのではなく、現在に生かすためのものだ」とよく仰っていました。その博識は日本・中国などの東洋史からローマなどの西洋史に至るまで幅広く、「六韜」や「孫子」などの兵法書の一節を引用し、時には脳外科医としての、時には人としての在り方について、現在に生きる我々の指針となるべき事柄をさりげなくお話しされるのがよくありました。そのお話しをお聞きすることはもうできませんが、濱田先生の生き様は我々にとっては、どんな歴史書にも勝る指針となりました。

「浄教院釋秀潤」の法名が示すように、濱田先生は真の意味での教育者でした。言葉で、行動で、そしてその生き様で教えていただきました。その教えを胸に、その教えに恥じないように我々はこれから道を歩んでまいります。最後になりましたが、濱田先生の眠りの安らかなることを祈り、また濱田先生に賜りました皆様のご厚情に感謝を申し上げ、追悼の辞とさせていただきます。

金沢大学医薬保健研究域医学系、 金沢大学脳神経外科同門会と濱田家による 故濱田潤一郎教授合同葬

医学系長 山 本 博

平成二十五年十月三十一日、濱田家、

金沢大学医薬保健研究域医学系、金沢大学脳神経外科同門会による故濱田潤一郎脳・脊髄機能制御学分野教授の合同葬が、金沢市鳴和台のセレモニーホール金沢で執り行われた。浄土真宗本願寺派養法寺

ご導師ほか三名の僧侶による読経につき、故濱田教授の恩師生塩之敬熊本学名誉教授、鹿児島ラ・サール中学校・高等学校の同級生笠井陽一氏、金沢大学脳

神経外科同門会島利夫代表幹事、金沢大学医薬保健研究域医学系長山本博の順で弔辞が述べられた後、焼香が行われ、親族代表あいさつを以て閉会した。前日の

お通夜を併せると、全国各地から、約六百名の参列者があり、約百六十基の花、約四百通の弔電も寄せられた。現職の教授を喪った悲しみと尽きせぬ惜別の情は式場に満ち、故人のご遺徳が偲ばれた。写真は、濱田教授のお棺とご遺族を

乗せ葬儀会場に向かう車列とそれを見送る本学教職員学生（医学類正門付近）。文末に医学系長弔辞を付す。合同葬にご弔問を賜りました金沢大学医学部十全

同窓会会員各位とご協力いただきました教職員の皆様に御礼を申し上げます。

弔 辞

故濱田潤一郎先生の御霊前に、金沢大学医薬保健研究域医学系を代表し、謹んで哀悼と惜別の辞を捧げます。

十月二十八日、忽然として不帰の人となられた先生の在りし日の音容尚耳目に迫り、幽明境を異にしている現しきを信じてぬまお棺の前に佇んでおります。顧みますと、

先生は平成十七年五月十六日、脳機能制御学分野教授として本学に着任されました。当時教室には、若い二人の助手を筆頭に計十三名の教室員を数えるのみで、研究科長職にあった私は、教室の主

任代行としても、先生のご着任を只管待ち侘びておりました。辞令伝達当日、金沢は晴れ渡り、先生をお迎えできた慶びが昨日のことのように思い起こされま

す。先生は、崩壊の危機に瀕した教室と診療科を、僅か数年のうちに、見事に建て直され、錚々たる中堅と若手を擁する今日の繁栄を築かれました。

研究面では、脳血管障害に対する新しい治療法の開発に関するトランスレー

ショナルリサーチ、脳腫瘍に対する新規診断・治療法開発に向けた基礎・臨床研究、神経機能ネットワークに基づく新世代の脳腫瘍手術の開発や神経内視鏡手術の応用などの領域で、国際学術誌に多くの優れた論文を発表され、金沢大学脳神経外科学の名を国内外に高からしめました。

管理運営面では、平成二十年度より、附属病院副院長長の要職を務められ、医療安全管理などで卓越した手腕を発揮されました。

誠に残念なことに、誰からも頼りにされ、益々の御発展が期待されていた先生を病魔が襲いました。骨髄移植も受けられて、一旦は回復され、教授・科長・副

病院長職に復帰された先生でしたが、薬石効なく、業半ばに仆れられました。附属病院のICUにお看取りさせていただいた帰路、故本陣良平金沢大学長の漢詩のつぎの一節がはげしくよび起こされま

した。

紅涙 紅涙
夢未回 残月墜

よびかけに応じてわずかに顔を向けられた濱田先生の眼にはまさしく紅の涙があり、裡なる残月には先生の顔が湛えられていたことです。

釋秀潤の法名に冠せられた浄教院の院号が示す如く、先生は類稀な教育者でありました。先生の志とお教えは、鬼手仏心を以て手塩にかけて育てられたお弟子さんたちによって、末永く継承されることと必定と存じます。

聊か個人的なことを申し上げますと、私にとつて濱田先生は、教授会の同僚たるを超え、心から話し合える友でありました。「一生付き合います」とのお言葉はいまも胸中に響いております。「一生」がもし来世も含むなら、どうか暫く待っていてください。

み霊の安息を祈りつつ、これまで賜わりましたかけがえのないご厚情に感謝の真を捧げ、弔辞といたします。

平成二十五年十月三十一日

金沢大学医薬保健研究域医学系長

山 本 博



病院紹介

独立行政法人地域医療 機能推進機構 金沢病院

『金沢社会保険病院』から『地域医療機能
金沢病院』へ

当院は昭和二十二年に社会保険診療の模範の実施、疾病予防を目的として国が設立し、公設民営の病院として地域医療に取り組んでまいりました。しかし、設立目的の意義が薄れてきたことに加え、社会保険庁が解体されたために、平成二十六年四月一日に厚生労働省所管の独立行政法人地域医療機能推進機構が直接運営する病院に移行いたします。既に病院の正式名称は『独立行政法人地域医療機能推進機構 金沢病院』、略称は『地域医療機能 金沢病院』と決定しています。まず地域医療機能推進機構について、次に当院の現況と将来計画についてご紹介します。

〈独立行政法人地域医療機能推進機構〉

機構に属する医療機関は全国各地に存在する四十七社会保険病院、七厚生年金病院、三船員保険病院の計五十七病院です。許可病床の総数は一万六千四百三十五床、一日入院患者数は一万二千人余りとなり、全国の入院医療のほぼ一%を担うこととなります。

機構の使命は「地域医療、地域包括ケア連携の要として超高齢社会に於ける地域住民の多様なニーズに応え、地域住民の生活を支える」であり、地域医療の向上を使命とする初めての独立行政法人と

なります。具体的には五事業・五疾病、リハビリテーション、その他地域において必要とされる医療及び介護を提供する機能の確保を図ることが目標です。国や自治体と「対話」しやすい立場というメリットを活かし、社会保障制度改革国民会議報告すなわち国の目指す方針である

①「病院完結型」医療から「地域完結型」医療への転換 ②医療、介護、生活支援まで切れ目ない体制の構築 ③「総合診療医の養成」に合致した病院グループを

目指します。

〈急性期医療と予防医療、福祉・介護事業〉

当院には公的な中核病院としては稀な「急性期医療から予防医療、福祉・介護までを行う事業体制」が備わっています。

一、急性期医療

病院は「患者さんに選ばれる病院」を理念に掲げ、①患者さんの意思と人権を尊重した医療の提供 ②質の高い医療の実施 ③救急医療、疾患の予防、健康管理の推進などの基本方針に沿った急性期医療を行っています。病床数は一般病床二百三十六床、HCU八床、人間ドック四床の計二百四十六床であり、外来診療は十六科が担っています。医師数は常勤医三十五人、非常勤医三十人であり、殆どが金沢大学医学部の派遣人事です。

五疾病への取り組みの主なものは、がん診療では消化管がんに対する腹腔鏡下手術にみられるように先進的医療に実践し、石川県指定の「地域がん診療連携推進病院」として様々な活動を行っています。

糖尿病については、代謝・糖尿病センターを設立し、患者指導、一般市民に対する啓発、近隣開業医各位との連携など幅広い活動を行っています。慢性腎

不全治療においても、血液浄化療法部門において昭和四十五年より人工透析治療を実施し、高い評価を得ています。脳卒中疾患に対する二次救急の急性期病院として積極的に重篤な救急患者の受入体制を構築し、二十四時間診察体制をとっています。最近の活動では、本年度より基幹型臨床研修病院の指定を受け、積極的に研修医の募集活動中です。さらに、幅広い分野の診療に対応すべく、総合診療医の認定医・指導医資格の習得に努めています。

二、予防医療

健康管理センター部門が担当して施設内健診とバス巡回健診を合わせて年間七万人の健診および特定保健指導を行い、がん検診、生活習慣病予防に積極的に取り組んでいます。

三、介護・福祉部門

介護老人保健施設『サンビューかなざわ』では、高齢者の自立や家庭復帰を目指し、入所百人、通所四十人を対象にサービスを提供しています。その他に金沢市の委託事業である『金沢市地域包括支援センター』、訪問看護ステーション『ひだまり』、居宅介護事業所『金沢社会保険介護支援センター』部門が地域住民の生活を支える介護・福祉活動を幅広く行っています。

〈病院の将来計画〉

当院には、既に医療から福祉まで切れ目のない患者サービスが行える機能を備えています。今後は『地域医療連携センター』を中心にして患者さん、利用者さん一人一人の社会的状況に応じた医療・福祉介護サービスを提供し、大学をはじめ自治体、医師会などの院外各組織との

連携体制を一層強化してまいります。さらに独立行政法人ですので、病院の実績、地域の医療・介護機関との連携などの目標達成度が第三者機関によって客観的に評価されます。

独立行政法人の病院に求められる責務を果たせるよう病院一丸となって努力してまいりますので、十全同窓会の皆様のご支援をお願いいたします。

(院長 喜多 一郎 記)



病院紹介

医療社団法人 和楽仁

芳珠記念病院

■外部環境

私ども芳珠記念病院は、石川県能美市（旧辰口町）の丘陵地に位置しています。能美市は、ご存知のとおり、元大リーグ松井秀喜選手や森喜朗元首相の出身地で、九谷焼でも有名な市です。産業面では、手取川の伏流水などの自然環境を活かして、数多くの企業が立地し、また辰口温泉やいしかわ動物園など、豊富な観光資源も有しています。さらに、近くには北陸先端科学技術大学院大学があり、住み良い街として全国の上位にも選ばれています。

■歴史

当院の前身は、一九二七年に仲井眼科医院として小松市に誕生しました。その後、一九六二年に仲井外科病院となり、消化器センターの開設やベッドの増床なども計画しましたが、旧辰口町からの病院開設の要望を受け、一九八三年、今の地に「辰口芳珠記念病院」を設立しました。二〇〇五年の市町村合併で能美市が誕生し、翌年現在の「芳珠記念病院」に名称を変更。昨年六月、おかげ様で創立三十周年を迎えることができました。

■理念

当院の理念は「仲よく楽しく 人と社会を健康に」です。私たちは、理念に医療法人の名称を付け、「モットー和楽仁」と呼んでいます。地域の皆さまとの心のふれあいを大切に、職員がお互いに尊重

し、自ら改革しながら理想を追い続ける、和楽仁にはこんな思いがこもっています。「仲よく楽しく」の風土がある当院では、多職種協働のチーム医療が進んでいると思います。

■機能

当院は、一般病床二百床、療養病床百二十床のケアミックス型の入院機能と精神科を除く多くの診療科、外来化学療法センターや生活習慣病センターなどの様々なセンター機能を有し、地域住民のニーズにできるだけ広く応えようとにも、診療所をサポートできる体制をとつてきました。二〇〇八年からはDPC対象病院となり、ケアミックスの強みを活かした病床運営を行っています。

五疾病五事業においては、南加賀エリアにおいて、がんと生活習慣病の診療に注力しております。がん診療では、誰から「重宝される」存在になることを目指して体制を整え、二〇一一年四月から「石川県がん診療連携推進病院」の認定を受けています。生活習慣病においては、特に内分泌代謝疾患に注力し、同じく二〇一一年四月には日本内分泌学会内分泌代謝科教育認定施設の認定を受けました。さらに、オリジナルキャラクター「病（やまい）モンスター」を作って地域での啓発活動を行ったり、原発性アルドステロン症の診療技術の開発や浸透を目的とした一般社団法人の設立運営に協力したりするなど、特徴的な取り組みをしています。

また、予防事業では、地域経済の振興への貢献を目指し、人間ドッグの宿泊先は全て近隣の辰口温泉にお願いしています。温泉旅館は平日の稼働率を上げ、当

院は院内のベッドを全て医療に使用でき、利用者は同じ金額で温泉に宿泊できるという三方良しの取り組みです。介護事業は、ほうじゅグループで取り組み、介護療養型医療施設の他に、居宅介護支援事業所、第三セクターの老人保健施設、小規模多機能型介護施設、高齢者対応型賃貸住宅、福祉用具貸与事業所などを展開し、地域密着型の展開を目指しております。

■電子カルテ「WATATUMI」

多職種協働のチーム医療を促進するうちに、電子カルテシステムによる情報共有が必須となり、昨年十月に念願の電子カルテ「WATATUMI（わたつみ）」（㈱コア・クリエイトシステム：宮崎市）を導入いたしました。このシステムは、本州の病院では初の導入となります。

診療の流れを時系列に表示することを基本とし、処理速度が大変早い（五年、十年使用しても「三秒ルール」を保証）ことに加え、スマートフォンと連動し情報参照や簡単なデータ入力にとどまらず、写真撮影と転送、バーコード認証などができ、主に看護師がベッドサイドで活用できるなどの特長があります。

また、データの二次活用がし易く、使用者のアイデア次第で使い方の幅が広がるシステムで、当院では、同意がとれた患者さんの検査結

果やアレルギー情報を院外処方箋に記載し、調剤薬局と病薬連携を促進しています。

■地域の多職種協働へ

当院が関係する医療圏には、ER機能を持ち急性期医療に特化する公的病院のほか、特色のある診療機能を有する民間病院が多くあり、それぞれで連携が進んでいます。このような環境の中で、継続して地域の予防・医療・介護・福祉に貢献していくにはどうすればよいか、地域に根ざした病院として、今後のあり方を考える重要な時期にきています。難しい状況ではありますが、自分たちの役割を明確にし、「仲よく楽しく」、地域の多職種・多業種でのチーム医療介護の促進に取り組んでまいります。

（院長 佐久間 寛 記）



形態機能病理学

(第二病理学)

〔沿革〕第二病理学教室は、大正十五年七月三日、杉山繁輝先生が、初代の第二病理学教室教授に就任し、本教室が発足しました。昭和十八年九月九日には、石川太刀雄丸先生が第二代の第二病理学教室教授として着任しました。昭和四十八年四月、太田五六先生が第三代の第二病理学教室に就任し、昭和六十二年五月には、本学第二病理学教室講師の中沼安二先生が第四代教授に昇任し、現在に至っています。平成十三年に大学院部局化に伴い、教室名が形態機能病理学研究分野に変更になっています。

〔教育、研究、診断〕教育は、分子細胞病理学教室(旧第一病理学)と協力して、医学部(医学類)の病理学の講義、実習を担当し、修士、博士課程での教育にも参加し、二三のセミナーを主催しています。研究は、中沼先生が教授就任後二十七年間、一貫して肝胆道系の病理学的研究を行っています。現在、中沼教授指導の下、佐々木准教授、原田准教授、佐藤講師が中心となり研究が展開しており、大学院生、研究生も研究に参加しています。現在までに、六十名の研究者が、中沼教授の指導で医学博士を取得しました。また、本学附属病院病理部での診断業務にも、分子細胞病理学の先生方と共に参加しています。北陸のいくつかの

病院の病理診断の応援も行っています。以下の課題を主に研究しています。

〔原発性胆汁性肝硬変(PBC)〕PBCは胆管の炎症性破壊を特徴とします。佐々木准教授を中心に、PBCでは障害胆管の細胞老化が胆管消失の要因であること、PBCの老化胆管細胞は老化関連分泌因子を介して胆管周囲の免疫調節に働くこと、胆管のオートファジー異常が自己免疫性機序に関与することを世界に先駆けて報告しました。また、原田准教授らが中心となり、胆道系自然免疫機構の解析、細胞障害性T細胞、胆管特異的免疫監視機構、胆管細胞死とエネルギー代謝の解析を行い、胆管上皮細胞における自然免疫応答にてサイトカイン、ケモカイン産生やアポトーシスが誘導され、自然免疫と獲得免疫との相互作用により胆管特異的な免疫環境からPBCの胆管病変の発生することを明らかにしました。全国調査からPBCからの発癌に関する本邦の実態および危険因子を把握し、肝細胞癌の合併を考慮した経過観察の重要性を明らかにしました。

〔肝内胆管癌・胆道癌〕当教室では、肝内胆管癌・胆道癌の臨床病理学的、分子病理学的研究を展開してきました。近年、当教室では太いレベルの胆管に発生する平坦型前癌病変BILIN、乳頭型前癌病変IPNBの名称を提唱して研究を進め、WHO分類にもこの名称が掲載されました。最近、佐々木准教授らにより、早期段階における胆管細胞老化、後期段階でのポリコム群蛋白ENH2過剰発現による老化からの逸脱が多段階発癌

に関与することを見出しました。また、BILIN、IPNBでのKRAS、GNAS変異の遺伝子解析を行い、発癌機構に関する新しい知見を報告しています。胆道癌においても、TCF8と転写因子Shn3を介した上皮-間葉移行EMTにより腺癌細胞がより高い浸潤能をもつ高悪性度の形質を獲得することを見出し、EMTが胆道癌の治療標的となる可能性を示しました。また最近、胆管周囲に生理的に分布する胆管周囲付属腺が胆道系ステム細胞のニッチとして大きな注目を浴びています。この胆管周囲付属腺と胆道系の病態生理との関連についての研究も進行しています。

〔肝内結石症〕肝内結石合併胆管癌の多くはBILINを介した多段階発癌の過程を経て発生します。当教室ではBILINの分子生物学的異常のいくつかを解明し、その中で熱ショックタンパク質がBILINや胆道癌の早期診断を可能にする胆汁パイオマーカーとなる可能性を示しました。当教室から発信したBILIN分類が広く一般的に用いられるよう、BILINの病理診断の標準化を目指した提言も行っています。

〔IgG4関連疾患〕IgG4関連疾患は日本発の疾患であり、自己免疫性膵炎を代表とする全身疾患です。現在、ロンドン在住の全先生、また原田准教授らが中心となり、IgG4関連硬化性胆管炎(IgG4-SC)の病態解析を行い、IgG4関連疾患におけるIgG4-SCの位置づけや病型分類、またIgG4陽性細胞の誘導機序について明らかにしました。さらにIgG4組

織反応はTreg細胞やIL-10などに制御性環境で誘導されること、IgG4-SCからの胆管癌の発生および胆道癌におけるIgG4陽性細胞浸潤の意義についても解析し、IgG4組織反応と癌との関連性に注目しています。

中沼教授は、二〇一四年三月に定年退官されます。これまでの、十全同窓会の皆様方のご指導、ご鞭撻に感謝申し上げますと共に、教室員一同、中沼教授の研究の集大成に向かって邁進しております。これからもご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

(佐藤 保則 記)



教室だより

細胞浸潤学

(歯科口腔外科)

沿革…教室は、昭和二十一年に設置された前身の金沢医科大学の歯科治療室（初代科長、湯本実）が起源になります。設置より十三年の時を経て昭和三十四年に文部省より正式設置を認可され、名称は金沢大学医学部附属病院歯科治療室となりました。昭和三十五年にそれまで所属していた第二外科から独立した診療科となり、二代科長として石田勝一が東京大学口腔外科より着任し、名称は金沢大学医学部附属病院歯科と改められました。昭和四十年に岡伸光が岐阜県立医科大学より三代科長として着任。八年間勤務後帰任し、昭和四十八年に玉井健三講師が四代科長・助教授に昇任しました。四年後の昭和五十二年に診療科教授、さらに昭和五十七年、講座昇格に伴い、医学部教授となりました。なお、その間の昭和四十八年に国立大学医学部附属病院の歯科は文部省訓令により「歯科口腔外科」と改称されています。昭和六十二年に玉井教授は特急列車内で五十三歳の若さで急逝したため、山本悦秀・札幌医科大学助教授が二代教授として着任しました。平成十三年の大学院重点化に伴い、研究分野として改組。金沢大学大学院医学系研究科がん医学専攻がん細胞学講座細胞浸潤学分野（歯科口腔外科）に名称変更され、さらに大学院組織の改組により平成二十四年からは医薬保健研究域医学

系細胞浸潤学となって現在に至ります。現教授の川尻秀一は、平成二十三年に三代教授に就任し、新たな診療・研究・教育体制の構築に取り組んでいます。

診療…一般的な歯科治療から専門性の高い口腔粘膜疾患、歯科インプラント治療、顎関節症、顎変形症、口腔癌治療を行い、口腔疾患のすべてに高度な治療ができるよう診療体制を整えています。その中でも特に以下の診療に力を入れています。口腔癌…前教授が確立した浸潤様式分類を用いて悪性度を判別後、適切な治療を行い優れた治療成績を得ています。顎関節症…保存療法に反応しない難治症例に対し、顎関節鏡下で高周波電気メスを用いることにより侵襲が少なく良好な結果が得られています。顎変形症…顎骨延長など新しい技術を取り入れ、咀嚼機能と審美性の著しい改善が得られています。歯科インプラント…高度先進医療として認定された平成十一年より患者数は大幅に増加しました。また骨量の不足のため従来適応外となっていた症例に対し、骨移植を行うことによりインプラント治療が可能になっていきます。口腔乾燥症…平成十六年に口の粘膜外来（ドライマウス外来）



を立ち上げたところ、現在までに九百名以上の受診がありました。口腔乾燥に伴う摂食障害、味覚障害、発音障害などさまざまな症状に対応しています。

研究…教室の従来からの研究課題である口腔癌と顎関節症に加え、川尻教授就任後は新たに再生医療が加わり、三つのグループが臨床に基盤をおいた基礎研究を進めています。

各研究課題の内容…

口腔癌…口腔扁平上皮癌の悪性度は様々ですが、この見極めに浸潤像の観察が有用であることが山本前教授の研究結果により明らかにされました。そこで教室では、この浸潤機序の解明を行っています。

口腔癌の浸潤様式は1、2、3、4C、4D型の五つに分類され、五年生存率を比較すると4D型では極端に低くなります。それぞれの浸潤様式に分類された臨床組織を用いて、各種の蛋白および遺伝子発現と浸潤様式との関連を検討しています。その結果、4D型で基底膜の破壊、細胞間接着分子の消失、蛋白分解酵素MMPの過剰発現、細胞運動因子の発現が明らかになっています。さらに、マウスを用いた浸潤・転移モデルと、線維芽細胞をコラーゲンゲルに組み込んだ浸潤モデルを作製し、高度浸潤癌に対する抗癌

剤や分子標的薬の効果も検討しています。

顎関節症…顎関節症の患者は増加傾向にあります。治療法に関しては意見が様々であり、医療機関により治療法や治療成績も様々です。その理由は、手術検体の入手が困難で、さらに実験動物モデルが確立されていないためです。そこで、顎関節症の病態解析と新しい治療法の開発を目的として顎関節症実験動物モデルの開発を目指しています。

歯科再生医療…歯科の臨床でう蝕が歯髓の一部にでも及ぶと壊死が徐々に全体に広がり、他の部位の歯髓が正常であっても全部除去する以外に治療法はありません。歯髓組織の除去後は歯牙が劣化し歯牙破折の危険性が高まります。超高齢社会において、歯を長持ちさせることは全身の健康維持にもつながるため、歯髓組織の再生が検討されています。これまで、歯髓幹細胞が細胞外マトリックス分解酵素のMMPを高発現していることを見出し、さらにイヌを用いた歯髓炎モデルでMMP処理した歯髓組織は壊死することなく組織再生が誘導されることを明らかにしています。この結果をもとに、新しい歯髓炎治療薬開発へ進めたいと考えています。

最後に、歯科医中心の当教室が大学医学部のなかでこれまで歩んで来られたのも、ひとえに同窓会の先生方の御尽力、御支援の賜物であり、深く感謝しております。今後とも金沢大学の一端を担うべく、また歯学部のない石川県において基幹病院として診療、研究、教育に尽力して参りますので、益々の御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

(中村 博幸 記)

支部だより

福井支部

平成二十五年八月二十五日、福井県越前市の「うおとめ」に於いて第六十四回金沢大学十全窓会福井県支部総会が開催されました。午前中は、小雨模様でしたが、総会が開催される午後からは、晴れて暑い日となりました。総勢三十五名の参加でした。

見学会は、越前市今立地区にある大瀧神社と越前和紙の里を訪れました。大瀧神社では、宮司の石川さんより案内していただき、雨上がりの神社を見学しまし



た。一時間ちよつとの時間でしたが今立地区の歴史ある名所を楽しんでいたかったです。

十五時より総会が開催されました。まず、この一年間で亡くなられました四名の会員に対し黙祷を捧げました。それから、竹内桂一福井県支部長より挨拶がありました。続いて来賓の佐藤保十全窓会会長より新図書館について、次に山本健十全窓会理事よりプロムナード整備事業などについてお話がありました。

その後は、金沢大学大学院脳情報病態学教授 三邊義雄先生より「子どものころの生物学」という特別講演を拝聴させていただきました。

記念撮影後に懇親会となりました。山内利夫武生支部長の挨拶後に、「合唱武生」の皆さんによるコーラスを楽しんでいただきました。その後は、おいしい料理とお酒を楽しみながら、懇親を深めていただきました。来年の開催地区である坂井地区の奥村良二先生より、挨拶をいただき、奥村忠先生の挨拶で閉会となりました。

(月岡 幹雄 記)

静岡支部

平成二十五年九月二十八日に会員一〇八名中、十六名が参加して、静岡県支部総会を開催しました。松田保秀支部長から役員交代について議題が提出され、土屋和弘副支部長が新支部長として承認されました。本部からは金沢大学大学院医薬保健学総合研究科経血管診療学(放射線医学) 蒲田敏文教授がご出席され、大学の近況について新図書館、CPDセンター、研究棟などのお話をされま



した。また、最近の学生の教育と先生のご研究についてもご紹介頂き、会員一同、大きな感銘を受けました。

懇親会では出席者全員が近況を報告しながら、親睦を深めました。次年度は支部総会を浜松にて開催することについて岡井高幹事から説明があり、閉会しました。

(深津 洋幸 記)

当日の出席者は次の通りです。池谷直樹先生、内田律子先生、梅原靖彦先生、大場範行先生、岡井高先生、加藤裕之先生、金田武志先生、佐野勉先生、竹内正和先生、土屋和弘先生、富松功光先生、西村和男先生、東茂樹先生、松田保秀先生、水野洋一先生、深澤洋幸。

埼玉支部

二〇〇三年に発足した歴史の浅い埼玉支部は二年に一度の総会を続けて、二〇一三年十月五日に十周年の節目にあたる支部総会を開催しました。恒例の母校の近況を伝えていただくお話は、二ヶ月前の八月三日に東京で関東拡大支部総会が開催され、佐藤保会長の新図書館の紹介及び山本博編集委員長の百五十周年記念誌の内容解説を賜りました。この二つの講演を聴いた埼玉支部の同窓生も多数おり、彼らからは「埼玉では異なる内容のお話を聞きたい。」との要望があり、十全窓会理事長加藤聖先生の本来の研究である「中枢神経の再生について」を拝聴しました。緊密で血の濃い埼



玉・東京ライン同窓生の学術講演は、昭和五十一年卒業菊池功次先生の「スポーツと喘息の生理学」を学びました。

懇親会では、埼玉支部生みの親でもある宮前達也先生に十周年の祝杯の言葉を賜り、賑やかに開宴しました。そして参加者の自己紹介や近況報告などのスピーチを聞きながら、アルコールの馬力と親睦はヒートアップしました。

二〇二二年より交代した支部長が二十年若返った為か？今回はベテランの先生方の参加が少し減り、若手の先生方の初参戦が増えました。平成四年卒業小林忠美先生と佐藤裕幸先生は、それぞれにさいたま市で整形外科と内科を開業されています。参加者最年少の平成六年卒業河野正志先生は、二内く放射線科く整形外科と幅広い経歴で、地域医療には非常に役立つオールマイティとして活躍が期待されます。同じく初参戦で懇親会から乱入しました昭和六十年卒業大場洋先生は東京支部から、秀毛範至先生に至っては遠路釧路からの長旅で、二人は久慈一英新教授の晴れ姿見たさに来たという、核医学教室OBの気合入った方々でありました。

最後に初代埼玉支部長の昭和三十六年卒業中川正明先生より締めめの言葉があり、次回は二年後に埼玉支部総会での再会を確認して無事に閉会しました。

(昭和五十六年卒業 瀬戸 幹人 記)

記念写真に写る参加者は向かって左から(敬称略)前列着席：坂井誠、久慈一英、宮前達也、加藤聖、中川正明、菊池功次、稲松孝思、

中列中腰：川内淳子、高木俊二、浅川晃、

川勝樹夫、中山光男、小林敏宏、瀬戸幹人、河野正志、

後列起立：市川聡裕、小林忠美、井上亮、松田博史、

佐藤裕幸、北野善郎、窪木外造、以上

京都支部

二〇二三年十月十九日(土)に岡崎、平安神宮の近くのザ・ガーデン岡崎にて開催しました。今回は十名の参加がありました。

京都ホテルオークラの直営で、フランス料理のフルコースにワインもふんだんにふるまわれ、皆に満足してもらったようでした。

昭和二十九年卒業の中村晋先生の乾杯の音頭で会が始まり、今回は久しぶりの参加者も三名あり、それぞれが自己紹介し近況が聞けました。昭和五十七年卒業の今井博之先生は、京都市民連中央病院を退職されてから京都市南区吉祥院で小児科クリニックを開設され、仕事軌道に乗ってきたので、幹事の昭和五十三年卒業の小野聡先生のお誘いにより出席してくださいました。昭和三十四年卒業の加納昭子先生は学生時代、兵庫県の日本海側から、山陰線、小浜線、北陸線に乗り継いで、鈍行で丸一日かかって金沢までたどり着いた話をされました。まだ懐かしい「ゆのくに号」もなかった時



代でした。金沢大学初代学長の戸田正三先生が加納先生の遠縁にあたられたので金沢まで行かれたとのこと。昭和三十八年卒業の松本由朗先生と昭和四十一年卒業の若泉悟先生は馬術部での馬の世話の大変な様子を懐かしそうに話しておられました。滋賀県の職場なのに京都在住とのことで京都支部にも加入してくださいている昭和四十九年卒業の桑原正喜先生は草津総合病院の理事長兼院長の重責を担っておられますが、その心の内を話され、そのご苦労に胸が打たれました。昭和四十年卒業の上田義博先生は柔道部での思い出を、小野聡先生と同学年の辻和夫先生は夏はヨット、冬はスキーを楽しんでおられる様子を話され、話題が盛り上がった楽しい語らいのうちに二時間が過ぎ、来年もここでの再会を誓って散会しました。(八田 一郎 記)

能登支部

これまでの「七尾・鹿島支部」を能登一円に発展させた「能登支部」が平成二十二年に発足しましたが今年度はその第四回目の会合として平成二十五年十一月十日(日)昼に、七尾市内の料亭「番伊」で「能登支部」総会・講演会・懇親会を開催しました。集まっていた会員は十名で、総会に引き続き、本部十全同窓会副会長で金沢大学学長の中村信一先生をお招きして講演を聞かせていただきました。総会では支部長の荒井邦夫先生が議長をされて会計報告などが行われ、また役員の改選では次期支部長に村本信吾副支部長が選出されました。この一年間の物故会員としては、七尾市中島

町「安田医院」の安田清先生が六月十一日にご逝去されました。現在の会員数は一四八名となっております。

学長の中村信一先生に講演をいただきましたがきゅうりや大根などの家庭菜園の話に始まり、医学部創立百五十周年記念事業のお話しや見える研究としての脳肝インターフェースメディスン研究センター新設のお話し、附属病院外来や研究棟、図書館や記念館改装などのお話しを伺いました。最後に金沢大学創基百五十年記念留学生支援キャンペーンへの協力要請も承り、盛り沢山の内容でした。

続いて懇親会に移りましたが、中村先生を囲み、荒井邦夫支部長の挨拶、櫻井



秀明相談役の乾杯で和やかに懇親会がスタート。それぞれの近況報告を兼ねた自己紹介などで、笑いの絶えない宴席となりました。最後は次期支部長の村本信吾副支部長から締め挨拶をいただき、日曜日昼のひと時を楽しく、有意義に過ごさせていただきました。

平成二十五年十一月十一日

十全同窓会「能登支部」

(常務理事 藤岡 正彦 記)

栃木支部

平成二十五年十一月十六日(土) 午後七時より宇都宮市にて、十全同窓会栃木支部会が開催されました。これまで栃木支部会は定期的には開かれておらず、今回は実に八年ぶりの開催となりました。支部同窓会員の参加者は前回の十名よりもやや増えて十四名であり、うち七名が初めての参加でした。同窓会本部からは何と顧問の竹田亮祐先生(元第二内科教授)にお越しいただき、参加者一同大変感激いたしました。

まず、栃木支部長の藤村昭夫先生(自治医科大学教授)より開会のご挨拶をいただき、次に竹田先生にご講演いただきました。お話の内容は、金沢大学医学部のトピックス(研究・教育・施設・百五十周年記念事業)、竹田先生の高著のご紹介に引き続き、「老化―記憶とオキシトシン」と題して、近年、オキシトシンが単なる子宮収縮ホルモンではなく、社会・情緒的機能や記憶にも密接に関連する神経ペプチドであることが明らかになってきたことをご紹介いただきました。竹田先生は八十路半ばにも拘わらず、そ



のご講演姿は大学の講義時とまったく変わらずに若々しく、大学時代を懐かしく思い出しました。また、最近になり研究活動はお止めになったとのことでしたが、ご講演の最後には今後の研究の課題を提示されるなど、いつまでも学問を追求していく姿勢に強く感銘を受けました。

その後は、益田澄夫先生の乾杯のご挨拶で懇親会となりました。初対面の会員同士も多かったことから、一人ずつ自己紹介を行うとともに大学時代の話を披露され、会は大いに盛り上がりしました。また、竹田先生からは、益田先生がいかに研究熱心であったかのご紹介もありました。参加者は、身近に先輩、後輩の存在

を知り、お互いの絆を深めることができたとあります。最後に藤村支部長から次の再開を約する開会のことばがあり、散会となりました。(安藤 仁 記)

前列右より

國峯英男先生、蘇原博史先生、益田澄夫先生、

竹田亮祐先生、青木秀明先生、松村正巳先生

後列右より

岡田耕治先生、岡田光子先生、神永時雄先生、

藤村昭夫先生、箕輪均先生、小川真司先生、茂

木絵美先生、安藤仁、松本尊嗣先生

岡山支部

平成二十五年金沢大学医学部岡山支部会同窓会が十一月三十日(土)、メルパルク岡山において盛大に開催されました。岡山支部では毎年この時期に同窓会を

を開催させていただきます。今回も懐かしい先生方の元気なお顔を拝見することができ、とてもうれしく思いました。参加者は卒業年度順に昭和四十三年卒業 島田公雄先生、昭和五十一年卒業 寺沢明夫先生、昭和五十四年卒業 孫崎信久先生、平成三年卒業 市川智継先生、平成八年卒業 浅海浩二(筆者 岡山支部長)、平成九年卒業 高木 徹先生、平成十二年卒業 梅原憲史先生、平成十二年卒業 門田弘明先生、平成十二年卒業 横溝 智先生、平成十三年卒業 徳毛誠樹先生、平成十三卒業 杉山成史先生の十一名でした。

美味しいお酒と料理をいただきながら、学生時代に帰ったように金沢での懐かしい話で盛り上がり、あつという間に時間が過ぎていきました。

また来年もお会いできることを約束して、会を終了させていただきました。

今回も幹事の杉山先生に大変お世話になり無事に会を終えることができました。来年度も早めに声をかけて参加者を増やし金沢から遠く離れた岡山での金沢大学出身者の繋がりを深めてまいりたいと思います。(浅海 浩二 記)

クラス会

八十年を生きて東京に集合 (昭和三十二年卒業)

秋晴れに恵まれた東京品川プリンスホテルメインタワーにて 平成二十五年十月十二日にクラス会が行われた。幹事は東京在住の西川慶繁君と滝澤進君、ホテ



ルロビー入り口に受け付けを構えて、皆の直到着を待っていた。二人とも元気でなによりであった。昨年、片山津温泉佳水郷ホテルまで不自由な体で来てくれた山口佳晴君は次は東京でと引き受けてくれたが、病気で来られず残念であった。あとの在京の友にはもう連絡も取れなかった。

午後五時集合し、記念写真を撮り、六時から懇親会が行われた。ご夫人同伴の人が多く、田崎喜昭君は夫人を亡くされてからはいつもお嬢さんをつれて出席したが、老人達の中の唯一の若い人で本当にかいがいしく皆の世話をしてくださった。お父さんの介助のみならず、二次会のカラオケや、翌日のバス観光の乗り降りなど旅行社の人のようであった。

皆、カラオケになったら青年に戻ったように歌いまくった。初めて歌うのと聞



いた人もいた。

翌日はバスで泉岳寺、六義園とまわり、まず曹洞宗萬松山泉岳寺ではお線香を上げて赤穂四十七士と浅野内匠頭らのお墓におまいりした。つづいて広い東京大学の横を通り本郷通りの六義園を散策した。小高い築山と広い池をもつ明るい庭園で元禄八年（一六九五年）、五代將軍・徳川綱吉から与えられたこの地に、柳沢吉保がつくった回遊式築山泉水庭園で、明治時代に入って三菱の創業者である岩崎家の所有となり、昭和十三年に東京市に寄付されて一般公開されたとの事であった。皆、足腰が弱り、バスの乗り降りも大変で、この二カ所でせいじつばいであった。幹事役の西川、滝澤のお二人本当にご苦労様でした。

本年は河村基君の訃報があり残念である。なお来年は金沢市の予定である。

(石丸 幹夫 記)

出席者は菊地誠夫妻、新谷博之夫妻、杉山正

彦、鈴木孝夫夫妻、滝澤進、田崎喜昭父娘、西川慶繁、福山裕三、松田嘉之夫妻、宮崎誠示夫妻、石丸幹夫夫妻の十八名であった。

「無憂会」

（昭和三十四年卒業）

「呉西に多くの会員がいるから、呉西で引き受けにやならんだろう」との前回時の奥田君の発言通り、奥田君を中心に大家、可西、河合、田中、西出の幹事団が世話役で、平成二十五年十月五日（土）、高岡駅前マンテンホテルで、無憂会（昭和三十四年卒業）のクラス会を開催、車椅子での出席者や同伴夫人を含めて三十三名が参加した（写真撮影後到着者三名）。

前回クラス会後の物故者二名に黙祷をささげた。上山君から庶務、会計報告後、密葬のケースがありその場合の対応や連絡を密にする等話し合った。赤祖父君と寺畑先輩との共著「金沢大学医学部百五十年史のための覚え書」が幹事団から配布された後、精神科の草野君（北陸メンタルヘルス研究所所長）から「認知症の予防」と題して約十五分話を聞いた。両親や患者さんの病状よりも自分自身の認知症のことを心配する高齢になったことを実感した。

恒例によって、最も遠くから参加した真田君（山形県酒田市）の乾杯で宴会が始まった。一次会は洋食やビール・ワイン中心で、五十年前の若者に戻った気持ちで、「某教授が授業中に突然怒って、『もうやめる』と言って本当に講義を中止してしまったことがあったな」とのエピソードも出た。これだけの高齢になると、表



彰や叙勲受賞者が何人も出ることになる。し君の叙勲をお祝いして、し君が「自分の力だけでいただけるものではなく、周辺の皆様の力添えのせいです」と話した後、X君が「わしは昔は天皇制反対だったが、今回はかあちゃんの助言もあり、皇居に参内し天皇陛下に拝謁してきた」と話した。「若い時と老齢になった時とでは考えが変わる」とことと、「この年齢になるとほとんどの家庭では、奥様に主導権がある」ことが分かった。「老いては女房に従え」。

これまでのクラス会で毎回多くの楽器を使って演奏をして皆を楽しませてくれ

た小坂君が前回奈良市での会合には残念ながら出席できず、今年の年賀状に「今年の高岡でのクラス会には必ず出席して演奏したい」と書いてきた約束通り、「今年は、新郎・新婦、老人、私の人生への応援歌シリーズです」と、ケーナ、リューター、オカリナ、尺八等八種の楽器を使って、「ホーム・スイート・ホーム」「故郷」「千の風になって」「上を向いて歩こう」等を演奏、最後に電子サックスの伴奏で田丸君が「南部蟬しぐれ」を歌い大歓声があがった。これに触発されたのか、某君が奥様に「あなたも一曲歌ったら」と勧め、小坂君の演奏で「花は咲く」を聴かせていただいた。もちろん、拍手、喝采が鳴り響いた。「これを聴いただけで、ディナーショウの価値があるね」との声が聞こえた。

ホテル内の居酒屋での二次会は、富山湾で獲れたキトキトの魚を中心の和食で、地元立山の大吟醸が飲み放題で夜遅くまで喚声があがっていた。

翌六日(日)は約半数が参加しての五箇山散策。ホテル前からバスに乗って一直線。富山医薬大時代に何度も訪れている上山君が、「昔とすっかり変わってしまった、親切な高齢の説明役もいて大変満足した」と語るように、地元の岩魚や山菜料理に舌鼓を打ち、道の駅で売っている「鱒の寿司」も富山市内よりはるかに美味しい。紅葉はまだ時期的に早かったが、さすが「世界遺産」と思わせる価値があった。「次はどこで開催するか決まらなかった」との声もあったが、奈良、高岡、の次はどこで行うかは、暗黙の了解事項だろう。二〇二〇年の東京オリンピックを見たいとは思わないが、金沢まで北陸新幹線が

開通する二〇一五年までは元気でいてクラス会に出席して、美味しい料理を味わい喚声をあげたいものだ、というのが老医たちの願いですね。(中村 彰 記)

「出席者 敬称略、五十音順
上山武史、大家啓一、岡田良康夫妻、奥田治爾、加納昭子、可西右使、河合康守、草野亮、元田憲、小泉昌久、小坂登志喜、小坂牧子、真田稔、嶋田修一、新城長昭夫妻、新谷謙次、田中道夫、田丸忠良、中川允宏、中村彰、南後千秋、西尾功夫妻、西出啓二郎、坂東平一、牧野勉、松田史郎、安元三郎、大和建昭夫妻、山本芳昭。

「三八会」

(昭和三十八年卒業)

昭和三十八年卒業生の同窓会 三八会の五十周年記念の会は、平成二十五年十月五日ホテル日航金沢において、五十一名(会員三十八名、同伴者十三名)が参加して開催された。今回は記念の大会にすべく、幹事一同(石崎、炭谷、竹越、中西、西部、渡辺)で企画を十分に練り、まずは、三八会員の物故者二十一名(飯田、北川、宮城、金原、八木、小西、北村、刊部、斉藤、一前、中田、林、藤田、石川克己、磨伊、弓削、内田、木戸、寺内、高野、水野君)に哀悼の献花式を行うこと、各地から馳せ参じてくれる皆さんに、石川県伝統芸能の粋をお見せする事、さらに、学生時代の懐かしい映像を編集して、回顧、楽しんでもらう事がきまった。当日はホテル四階の鶴の間のホアイエで開会一時間前から受け付け、しばらくぶりに会う同級生に団らんのか場を提供した。東京からは、松浦君が車椅子でかけ



つけてくれ、話の輪ができ、大いに盛り上がりをもせていた。

午後五時四十五分から、モーツァルトのレクイエムの流れる中、二十一名の映像写真の前で、順次献花し、早く逝かれた友人の冥福を祈った。今回欠席した十二名の方々(飯泉、宇津見、岡島、木谷、北山、清水、白井、武田、壇原、原田契一、

松本裕史、森井君)からは献花のお花料をいただき、同窓会の輪に加わっていた。ついで、集合写真を取り、鶴の間の会場に着席、竹越君の尽力でお招き出来た今回の目玉「いしかわの至宝」、笛の藤倉秀扇さんと鼓の堅田乃莉さんによる「一調一管」演目「飛翔」が演奏された。笛と鼓の挑戦的な二つの音色に全員、感動、至福の時間を過ごすことができた。尚、お二人は今年の金沢市文化賞を受賞されました。ついで、総会に入り、渡辺君の進行で、幹事を代表して竹越君が今回のいきさつの説明、今後の高齢化時代についてはお互いに励ましあう大切さの挨拶があった。会計報告の後、伝統芸能では欠かせない「素囃子」演目「祝三番叟」を西の芸奴衆によつて演奏、五十周年を祝っていただいた。乾杯は名古屋の中村暁君、父君がまだ百歳で現役の事にふれ、高らかに乾杯を発声した。ホテルの料理やお酒類をいただきながら、芸奴衆による踊り二曲「金沢風雅」「さわぎ」がにぎやかに披露され、会はいやがうえにももりあがった。芸奴衆との歓談が終わってから、渡辺君が苦心して集め、編集した、学生時代を回顧する、金沢の街、大学生活、部活、恩師、三八豪雪のなかでの卒業試験など、七十二枚の映像をBGMの九曲(ウエストサイド物語)「風と共に去りぬ」などの流れる中、投映、簡単なコメントが渡辺君によつて付け加えられた。ついで、各自のスピーチに移った。学生時代の苦い経験や失敗などが多数語られ、五十年経た今では、楽しく聞くことができた。スピーチの間にも、当日上映された映画のポスターをスライドにし、サントラをB

同窓生の消息

第一回

日本周産期精神保健研究会

GMとして二十九曲(「慕情」「太陽がいっぱい」など)が流れ、時間の過ぎるのを忘れてしまいうでであった。しかし、お聞きの時間になり、来年の世話人である、倉塚君から中締め挨拶と松江市での三八会を歓迎する旨の発言があった。最後には二次会、ホテル三十階へ、二十二人の方々も参加、さすがに十二時頃までで閉会させていただいた。

翌六日はゴルフ組は十二名(大江、鍛冶、瀬尾、瀬尾夫人、土田、土田夫人、寺邑、寺邑夫人、高橋、蓮村、駒井、渡辺君)が参加し、白山、泉水コースで好天の中、スコアに関係ないゴルフを楽しんだ。

観光組は二十二名、貸切バスでホテルを出発、金沢医学館跡地の碑をみて、小立野の母校を訪ねた。百五十周年記念の銅像「医の源流―未来への継承」、修復されたキンストレーキのある資料館、また新装なった医学図書館を山本総務係長と中本図書係長に案内していただき、説明を加えていただいた。また、数年後には十全講堂の前がプロムナードとして生まれ変わるとのお話、その頃には母校を訪ねる事も考えておこうと胸に収めたものです。お二人には日曜日にも拘わらず出勤、われわれを歓迎していただき、深く感謝申し上げます。次に向かったのはいいのき迎賓館ですが、丁度、俵屋宗達と琳派の作品が展示されていたので、石川県立美術館へ立ち寄る人が多く、その後、いいのき迎賓館に集合していただいた。お昼は有名なポール・ボキューズでランチを楽しみ、来年の松江市での再会を約して、午後二時に金沢駅―ホテル日航金沢で解散した。

(中西 功夫 記)

平成二十五年十一月二日(三日)、松下IMPホール(大阪市)において第一回日本周産期精神保健研究会を主催いたしました。周産期精神保健研究会は平成二十一年に新生児科医、臨床心理士、看護師・助産師の有志が中心となり、少数の産科医、小児外科医及びケースワーカー等が加わって胎児・赤ちゃんと家族のこころの健康を支えることを目的に、そのあり方を研究・実践する研究会として設立されました。これまで年二回地方会という形でテーマを決めた検討会をしてきました。主なテーマは「NICUにおける多職種による母子の支援」、「産後うつ・解離性障害の母と子への関わり」(この回の会長は本学昭和五十二年卒業の久保 実先生)、「精神保健からみた出生前診断」あるいは「NICU退院・在宅移行支援体制に周産期精神保健の視点を」等でした。有意義な研究会でしたが、設立の理念を実現するためには周産期医療に関わる多職種の医療従事者の参加と全国レベルの研究会にすることが不可欠と考え、研究会名に「日本」を付けて第一回の学術集会を開催致しました。

知名度が低いことから参加人数が気になっておりましたが、予想を遙かに超える六百名の参加がありました。心の時代に周産期精神保健の重要性を感じている人が如何に多いかということの表れだと思います。メインテーマは「親子の物語が始まる時、私たちにできることは？」とし、これに沿ったプログラムを作成しました。第一回であるので周産期精神保健の何かを知って戴くために四題の教育講演を

しました。「周産期医療と精神保健の出会」(元聖マリリアンナ医大新生児科 堀内勁教授)、「周産期医療の場にこころの視点を」(山王教育研究所臨床心理士 橋本洋子先生)、「虐待死から考える周産期精神保健」(月齢一カ月を迎えられない子どもたち)「筑波大学人間系 宮本信也教授 本学昭和五十三年卒業)、「周産期医療から学ばれた心」(元東京女子医大母子総合医療センター所長 仁志田博司教授)です。精神保健の核心は患者の声に耳を傾けることと考え、哲学者で倫理学者でもある前大阪大学総長 鷲田清一先生(ベストセラー『聴くことの力』の著者)に特別講演「聴くことの意味」をして戴きました。また、児童文学作家で童話の語り部でもある宮川ひろ先生(あて名のない手紙)などの著者、第四十六回日本周産期・新生児医学会でも招待講演をしていただきました)に招待講演「作品『天使のいる教室』をめぐる」を

第六七回 国立病院総合医学会

平成二十五年十一月八日と九日の両日、石川県立音楽堂、金沢市アートホールおよび周辺のホテルにおいて、第六十七回国立病院総合医学会を開催いたしました。本学会は全国の国立病院機構



事務局をして戴いた新生児科医 平野慎也先生と。ポスターのデザインは金沢美術工芸大学視覚デザイン科の後藤 徹教授

して戴きました。「周産期精神保健」私たちができることは」をシンポジウムとし、九職種の医療従事者に周産期精神保健への関わりについて討論して戴きました。「親子の物語とNarrative Based Medicine (NBM)」と題した会長講演をしました。第四十六回日本周産期・新生児医学会の会長講演では、フォローアップにおけるNBMの重要性について話しましたが、今回は周産期からのNBMの重要性を強調しました。会場は熱気に満ち、後日、「周産期精神保健が目指すものがわかった」「周産期精神保健の重要性がわかった」「感銘を受けた」「また参加したい」等のメールを沢山戴きました。

(窪田 昭男 昭和五十年卒業 記)

百四十三施設に加え国立高度専門医療研究センターや国立ハルセン療養所の職員が一堂に会して学術

的成果を発表することを目的としています。通常の学術集会とはやや趣を異にし、一般医療のみならず神経・筋難病など国立病院機構が主体となって担う政策医療や医療安全など幅広い分野について

学生課外活動支援報告

西日本医科学学生総合体育大会

第六十五回西日本医科学学生総合体育大会は、主幹九州ブロック、代表主幹校九州大学の運営のもと、平成二十五年七月三十一日から八月十八日の十九日間に亘って開催されました。開催地が福岡県であり、例年に比べ遠方で、開催時期がお盆と重なったため交通手段の確保が困難でした。また、猛暑の影響で参加選手の中症が危惧されましたが、終わってみると予想よりもはるかに少なく無事に終えることができました。

今大会における金沢大学の成績は、参加大学四十四校中第十五位と昨年の二十六位に比べ順位を上げることが出来ました。

このような良い結果を収めることができたのも、日ごろの鍛錬の成果であり、また、このような私たちの活動に理解を示し、ご支援を下さる十全同窓会の皆様、OBの先生方のご尽力の賜物であると実感しております。参加者は大変貴重な経験をし、良い思い出を作ることが出来たと思います。この場をお借りして、ご支援いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

来年度は金沢大学が代表主幹校であり、大会の運営とともに選手一人一人がベストを尽くし更なる成績向上を目指し努力をして参ります。今後とも更なるご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

各部の主な成績

弓道部 男子九位
団体

卓球 男子五位
陸上 男子団体総合六位
剣道 男子四位

(第六十五回西医体評議員

医学類四年 赤崎 恭太 記)

白山診療班活動報告

日本三名山の一つであり、古くから霊山として人々の信仰を集めてきた白山。白山診療所は、そんな白山の頂上近くに位置し、夏山シーズンの間、登山客の方々の健康を見守ってきました。

診療所の生活では、大自然の素晴らしさを味わえるだけでなく、先生方の実際の診療を間近で見学することもできます。学生にとっては、普段なかなかできない

医師、看護師、薬剤師などの医療スタッフに事務職も加わって発表・討論する特色ある学会です。本学会が金沢で開催されるのは前回平成十年以来実に十五年振りであり、金沢医療センターと国立病院機構王病院との共同主催でした。

幸い前日の悪天候とは打って変わって学会当日の天候にも恵まれ、全国から約六千名を超える会員の参加をいただきました。学会のテーマは「Vita Nuova(新生)」！国立医療・新たな船出に向けて」としました。これは医療界の荒波に翻弄されながらも着実に歩んできた国立病院機構が新しい法人形態(新生)へ移行(船出)することを意識したものです。が、政権交代によりその動きが凍結された感があり、改めて我々機構職員の願いを込めたスローガンの意味合いを持つものとなりました。



学会は特別講演二題、シンポジウム三十二題、ランチョンセミナー十八題、一般演題二千四百八題で企画され、特別講演では金沢在住のファッション・エッセイスト、フランソワーズ・モレシャン氏に「元気に生きるおしゃれな生活」と題してご講演をいただきましたが、日仏文化の比較から文明批評にいたる深い洞察とエスプリに満ちた示唆に富む内容でした。また、もう一つの特別講演では日本大学名誉教授、押田茂實氏(法医学)が「最近の医療事故裁判とリスクマネジメント」と題して講演され、医療事故の典型的な事例をDVDによる再現ドラマ(ヒヤリハット劇)で提示し、刑事責任・民事責任・行政処分との関係を解説されました。シンポジウムは多職種の参加する学会であるためそれぞれが抱える課題も多く、「国立病院機構が提供する医療とその経営」に始まり、「がん患者を支える口腔ケア」などその内容も多岐にわたることが特徴でした。

学会一日目終了後の全員交流会には北陸の食材やお酒を味わおうと千二百名もの会員が集まり、会場は大変な混雑でしたが、北陸金沢の良さを多少なりとも知っていただけたのではないかと思います。本学会が成功裏に幕を閉じましたのも、特に座長の労を執っていたいただいた先生方をはじめとする十全同窓会会員の格別なご支援の賜物と心から感謝申し上げます。

(能登 裕 昭和四十七年卒業 記)



体験ができると好評であり、現在、白山診療班には多くの学生が在籍しています。今年度も数多くの学生が登り、夏山シーズン中のほぼ全ての期間で、登山客の方々の対応にあたることができました。

また、お忙しい中、多くの先生方にも登っていただきました。特に登山客の集中する土日に登られることが多く、たいへん心強かったです。

今年度を振り返ると、天候に悩まされることの多いシーズンであったと感じています。集中豪雨のため、登山道が通行止めになったり、開所期間を予定より早めなくてはならなかったりと、思うようにいかないこともしばしばありました。荒れた天候のためか、患者数は前年度を上回りました。大雨の中登山された方々の中には、風邪や怪我の方が特に多かったように思います。自力で下りられず、救助ヘリが飛んだことも数回ありました。今後はこうした異常気象に備えて、事前の対応を十分に考えておく必要があるかと思っています。

末尾ながら、この度、白山診療班は副学長賞を受賞いたしました。長きに亘り診療所を支えてくださっている先生方があってこそこの受賞と感じています。ありがとうございました。診療班の活動が長く続くよう、十全同窓会の皆様方と先生方におかれましては、これからもご支援・ご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

(医学類四年 石黒 賢志 記)

立山診療班活動報告

北アルプス北部に位置する立山連峰は、澄み切った青空や咲き誇る高山植物、雄々しい山々の壮大な景色が訪れる者を魅了する、富山県最大の観光地です。

私たち立山診療班は七月下旬から八月下旬の約一ヶ月の間、この立山にて起こる登山客や観光客の疾病や事故に対し、富山県警察山岳警備隊・周辺の山小屋や環境省の方々の協力のもと、診療所(室堂・雷鳥沢・剣沢の三カ所)にて無償で診療活動を行っています。診療所では診療



活動自体は医師が行い、学生は医師の診療の補助や診療所での炊事・掃除などを行うという体制をとっていますが、学生にとつては実際に患者さんと接したり、生の臨床現場を体験したりすることのできる大変貴重な場となっています。

本年度の活動について、富士山が世界遺産に登録されたあたりをうけた為か、立山への登山客も増加したということでしたが、患者数自体は昨年度よりも減少という結果となりました。運営につきま

しては、今年度も登山客の多い土日にはいずれかの診療所に医師がいる環境の確保はなんとか達成できましたが、それでも医師が足りていない現状です。今この会報をご覧になっている診療班OBの皆様、学生の頃を思い出しつつ避暑目的の半分でも参加して頂けたら幸いに思います。また診療所の存在を世間に知って頂くことも重要と考え、ホームページを作りましたので、そちらも是非一度ご覧いただければ幸いです(インターネットにて「立山診療班」と検索願います)。

最後になりましたが、OB・OGの先生方をはじめ、活動を支援してくださった皆様、十全同窓会の皆様のお陰を以ちまして、本年度の活動も無事に終えることができました。厚く御礼申し上げます。

(医学類四年 岩本 隼輔 記)

ACLS金沢活動報告

ACLS (Advanced Cardiovascular Life Support) 金沢では、BLS・ACLSを中心とした救急蘇生法についての知識や技術を習得するために、学生同士



で勉強会を行っています。BLS(一時救命処置)である心肺蘇生・AEDを用いた除細動・窒息に対する異物除去などの基本的な技術から、気管挿管・除細動などといった高度な治療を用いたACLS(二次救命処置)まで幅広く学んでいます。講義だけでなく、実際に治療に用いる機材を使って手技練習するので、より臨床に近い体験ができます。全国の多くの医学部にACLS部(サークル)があり、それぞれの大学が開くワークショップ(WS)に参加しています。

WSを通じて私たちは多くのことを学んでいます。それは医学的な内容に留まりません。大勢での議論を時間内にまとめたり、参加者の連帯感を高めるためのアイスブレイキングを工夫したり、より効果的に記憶を定着させるためのレク

チャーターを考えたりしています。パワーポイントに使うフォントから配色、フィードバックに適したホワイトボードの使い方に至るまで、WSでは非常に綿密に計算されています。そうした、普段の授業では学べないスキルを全国の仲間と切磋琢磨できることこそ、このサークルの最大の魅力だと感じています。

新しい試みとして、本年度の四月から「北陸勉強会」という活動が始まりました。金沢大学・富山大学・福井大学・金沢医科大学のACLS部が集まり、月に一、二回程度の頻度で勉強会を実施しています。また、十一月には参加者を北陸四大学に限定した小規模なWSを行いました。今後は、勉強会で培った知識や経験をもとに、北陸四大学によるWSを画策しています。最後になりましたが、私たちの活動を支えてくださる救急部や麻酔科蘇生科、そして十全同窓会の先生方に感謝申し上げます。(医学類二年 前田 紗里 記)

Live Aid Kanazawa

Live Aid Kanazawaは公民館や幼稚園、保育園、学校、イベント会場など様々なところで大人、小児、乳児に対する初期救命法(BLS)を一般市民の方々に無償で出張講習しています。石川県の救急救命率向上に微力ながら貢献できればと考えております。

BLSとは、急病人に対して居合わせた人が救急隊や医師に引継ぐまでの間に行う応急手当のことです。一人でも多くの人にBLSを知っていただき、いざというときに適切に動けるよう、心臓マッサージの方法、AEDの使い方を中心にわかりやすくBLSを教えています。

一般の方が心臓マッサージと人工呼吸の両方を行った場合よりも、心臓マッサージだけを行ったときの救命率のほうと同じかやや高いことや、心臓マッサージ

によって心室の細胞が元気になり、AEDが効きやすくなることも明らかにされています。救急車が到着するまでの間にBLSを行うことは、傷病者の救命にとっても重要です。なかでも、心臓マッサージ、AEDを使用することは非常に重要であると言えます。

この活動を通して、私達もいかにわかりやすく教えるのかを学ぶことができ、とても良い勉強になっています。

更に、私達は医学類の学生を対象に講習会も行っております。これらの講習会では医師になつてからでも役に立つ救命方法を学ぶことができ、学生間で教え合うために知識を深めることができるため、講習会を行う度に高度な救急救命処置を学び、自分の勉強不足を自覚し、良い刺激となっています。

末筆ではございますが、ご指導・ご協力くださる救急部・稲葉英夫教授、福井県済生会病院・竹越靖夫先生、そして、

活動をご支援くださる十全同窓会の皆様
に厚く御礼申し上げます。
(医学類五年 加畑 映理子 記)



第六十六回 西医体運営委員会 活動報告

第六十六回西日本医科学生総合体育大会は、金沢大学が代表主管校となり、金沢医科大学、浜松医科大学、名古屋大学、富山大学、藤田保健衛生大学のご協力のもと、平成二十六年八月八日～十八日に開催されます。

第六十六回西医体運営委員会は昨年初めに発足し、第六十四回大会、第六十五

回大会の運営委員会の先輩方から運営のノウハウを学んできました。十一月に行われまして引き続きにて、第六十五回西医体代表主管校である九州大学より業務を引き継ぎ、本格的に第六十六回西医体運営委員会の活動が始まりました。今後は、四回の評議会と二回の理事会、及び開会式、閉会式等の業務を行うこととなります。大会当日は熱中症や事故等ないように、事前に対策を講じて参ります。

西医体は来年で第六十六回を迎える伝統のある大会です。また、参加人数は一万五千名を超え、全国的にみても国体

に次ぐ大きな大会となっています。このような大きな大会を運営することは、後にも先にもこれが最初で最後でしょう。伝統ある大会を運営させていただくことに誇りと責任をもち、西日本の医学部生が一年間で最も熱くなれる大会を作れるように、運営委員会一同、精一杯努力していく所存です。

最後になりましたが、西医体の運営には、多くの方のご協力が必要不可欠です。各大学の理事の先生方、評議員の皆様、派遣医師として会場で待機して頂く医師の皆様、審判や会場確保にご協力頂く各

競技の連盟・協会の関係者の皆様、その他関係各位の皆様にはこの場を借りまして深くお礼申し上げますと共に、今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。
(医学類三年 村 宏樹 記)



医学展を終えて

医学展二〇一三実行委員長 医学類五年

相馬 麻由子

初春の候、十全同窓会会員の諸先生方におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

十一月二、三日に開催されました医学展二〇一三は、二日目の悪天候に見舞われたにも関わらず、八千人（前年度約六千人）近い来場者を迎えて盛況のうちに無事閉幕することができました。十全同窓会の皆様方には、医学展二〇一三開催に向けてご支援、ご協力を賜り、医学展実行委員会一同深く御礼申し上げます。

今年度の医学展の開催にあたり、私達医学展実行委員は“MORE!”というテーマを掲げました。昨年は金沢大学医学部創立百五十周年を迎え、金沢大学、医学展共に一つの節目を迎えたように思います。このテーマには、今年は節目を越え更に成長した医学展にしたい、という思いが込められています。

毎年ご好評をいただいている医学展ですが、やはり医を知る・体験できることが、医学展ならではの魅力であると思っております。今年は昨今話題となっているiPS細胞、ES細胞の展示や、救急救命士の仕事を実際に身体を動かして体験するなどの新しい企画にも挑戦いたしました。またステージ企画では、子ども向けヒーローショー「イガクテンジャー」や、NHKの人気番組「ドクターG」のパロディー企画など、劇を交えながら医学に触れてもらえる企画を行い、幅広い年齢層の方に楽しんでいただくことができました。

今年で復活から七回目となる医学展ですが、組織や資金繰りなどの様々な面において改善すべき点が未だにあります。医学展がこの先どのような方向へ向かうかは分かりません。しかし、発信・交流したいという学生の想いと、来場者の皆様の期待に応えるべく、私たちが行ったことが次につながるよう支援していく所存でございます。十全同窓会の皆様には、医学展の更なる発展のためとご理解いただき、ご指導、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。



金沢大学医学図書館記念モニュメント除幕式

平成二十五年十月七日、さわやかな秋晴れの中、金沢大学医学図書館記念モニュメント除幕式が挙行されました。医学図書館は、平成二十五年三月十四日にリニューアルオープンされ、従来の一・七倍以上に拡張され、教育研究の新たな拠点として生まれ変わりました。この新医学図書館を将来にわたり宝町地区の医療・教育・研究の象徴として位置づけ、ここに集う人々すべての

ニユメントとなりました。除幕式は、中村信一学長による挨拶、加藤聖十全窓会理事長による祝辞に続いて、制作者の笠原健司氏によるモニュメントを制作した意図が説明されました。その後、中村学長初め、医学部関係者、図書館関係者一同によるモニュメントの除幕が行われまし

の拠り所となる医学図書館モニュメントを、十全窓会のご協力のもと設置することができました。モニュメントはその名を「Gene of Library」（図書館の遺伝子）と言い、そのデザインは、古今東西の医学書を積み上げることによって生命の二重らせんとなし、医学のみならず、人類の知恵と科学の進化をイメージしたものです。今年は一九五三年のワトソン・クリックによる、DNA二重らせんモデル発表からちょうど六十周年記念にあたり、医学図書館にとって誠に意義深いモ



現代の医学生は誰の伝記を読みたいか？

金沢市・松原愛育会松原病院名誉院長
山口 成良やまぐち なりよし

私は毎年、母校から頼まれて、医学部1年生に「医師の使命感ー野口英世と永井軍医ー」と題して特別講義をしてきた。永井軍医については本誌第3905号（1999年）に書いたことがある。明治35年（1902年）の八甲田山雪中行軍で遭難死した軍医で、私の母校出身である。2人とも人間愛に殉じている。

一昨年（2012年）の講義の前に「野口英世の伝記を読んだ人は挙手してください」と問いかけたが、昨年はアンケートを試みた。アンケートの内容は「1）これまでに読んだ医療関係者の伝記で感銘を受けた人物の名前をお知らせください 2）これから読みたい医療関係者の伝記の人物の名前をお知らせください」であった。

1年生112名（男性82名、女性30名）のうち、75通のアンケートが講義の終わりに提出された。すでに読んだ伝記で感銘を受けた人物は、野口英世、ナイチンゲール、キュリー夫人、シュバイツァー、手塚治虫、マザー・テレサ、高峰譲吉などであった。これから読みたい伝記の人物は、私の講義の後のためか、野口英世を筆頭に、キュリー夫人、北里柴三郎、シュバイツァー、森 鷗外、エドワード・ジェンナー、志賀 潔、コッホ、レントゲンなどが挙げられ、新しい方では山中伸弥、天野 篤と書いた学生もいた。

私の若い時も、野口英世、キュリー夫人、シュバイツァーの伝記を読んだが、手塚治虫とは同年代であり、ナイチンゲール、マザー・テレサの名前が出たのは女子学生が3割近くいたためかも知れない。

なお、医療関係者の伝記を読んだことがない学生が1割近くいた。この学生たちは先輩を見習わず、独立独歩の精神を貫こうとしているのか、また人物というものに興味がなく、物質だけに興味があるのか。現代医学生気質を一部表現しているようにも思われる。

日本医事新報 No.4680 炉辺閑話2014より

た。モニュメントを開む約七十名の参加者からの盛大な拍手の中、医学書によって積み上げられた二重らせんの像が姿を現しました。除幕の後、モニュメントと一緒に除幕者の記念撮影が行われました。



十全昔話

三人の恩師

川浦 幸光 (昭和四十八年卒業)

私は今年で六十五歳になりました。私は団塊の世代に生まれ、常に競争を余儀なくされています。墓場まで競争です。私達の学年はインターン制度の廃止を求める医局紛争の煽りで単位数が不足して、夏休みや冬休みを短縮して、ようやく昭和四十八年三月に卒業できた学年です。私は入学した時からすでに第一外科と決めていましたので、迷うことなく第一外科学教室に入局いたしました。私は当初から消化器外科を志していました。入局後、心臓外科、胸部外科、消化器外科（小児外科を含む）、血管外科をローテーションいたしました。

幸いにも三人の恩師と出会い、外科医のあるべき姿を教えられました。三人の恩師の想い出を記します。

〈よい研究者になるには四Gが必要だ〉

私は医学部に入学した時からドイツ医学に憧れがありました。大学院を卒業した一九七七年、ドイツのカールスルーエ (Karlsruhe) 市立病院に正規職員として勤務する機会を得ました。人口三十万人のカールスルーエ市にある外科単科の市立病院で、三百床を有しています。

ここでは毎日八時から手術開始でした。手術症例は一日平均六十数例で、一人の医師が一日平均五〜八例の手術を行っていました。

この病院を率いていたのがProfessor Kurt Spohnでした。指導は厳しく、毎日七〜八例のPrivate Patientenの手術をこなしておられました。

私は三ヶ月間、教授の手術に助手として

て参加させていただき、指導を受けました。その後はOberarztと一緒に手術を行いました。どの医師も手術は早く、大腸がんの手術でしたら、皮膚切開から皮膚縫合まで約一時間でした。無駄な待ち時間がなく、執刀と同時に隣室で次の手術の麻酔が開始されます。十六時になると執刀医も助手も看護師も途中で変わり、Oberarztがチームに委ねられます。

ある日の私の担当した手術を書きますと、胆嚢摘出術→肺葉切除術→胆嚢摘出術→直腸癌手術 (Miles手術) →甲状腺亜全摘術→胆嚢摘出術でした。

瞬く間に一年半が過ぎ、ドイツでの生活も残り少なくなったある日、私と家族を食事に招待していただいた時に、これを感じておくようにと色紙に四つの単語を書かれました。ノーベル生化学賞受賞者Pam Elmerが受賞記念講演で述べた言葉であるとのことでした。

「研究者として成功するには四つのG (ゲー) が必要だ。Geist (才能)、Geduld (忍耐)、Geld (金)、Glück (運) である」。私には忍耐があるがGeldは全く縁がありません。せめて残り三つのGが備わりますようにと念じながらドイツを後にしました。Spohn教授からは無駄のない、流れるような手術を教えられました。

〈手術すべきタイミングがある、自分の直観を信じよう〉

ドイツから帰国してすぐに福井県立病院へ行くように医局長から言われました。福井県立病院では山崎信先生が外科部長で、背が高く、がっちりした体格で廊下を颯爽と歩いておられるのを見ると、古武士的な雰囲気を感じられました。

山崎先生は胃がんの早期発見のための

検診に並々ならぬ情熱を持っておられました。一日あたり八〜十例 (多いときには十五例を超えることもあり) の胃癌手術を執刀されました。実に早く、無駄のないきれいな手術を毎日見せていただきました。皮膚切開が始まると隣の手術室に次の患者が入室し、麻酔が開始されました。一例の手術に要した時間は一時間以内でした。ドイツで行われていたシステムと同じであり、感激しました。

ある日、十二指腸潰瘍穿孔の患者を受け持つことになりました。若くて全身状態がよく、腹膜刺激症状や腹痛が軽度で、CRPや白血球数が軽度増加していたのみでしたから、保存的治療が可能と判断しました。丁度、山崎先生の総回診があり、「すぐに手術せよ」と言われました。開腹するとEber, Braggが穿孔部のみならず、腹腔内全体にびっしりと附着していました。もつと早く開腹すれば良かったと反省することしきりでした。このまま様子をみていたらDICや敗血症が必発であつただろうと自分の愚かさが身に凍みました。幸い、順調に経過したので良かったですが、検査値と病態は必ずしも一致しないという教訓を得ました。

山崎先生は後で次のように言われました。「まだ待てると思っても腹膜刺激症状が少しでもあれば直ちに手術をすべきだ。手術所見が軽度だったから早くに手術してよかったねと言えよ。手術のタイミングを逃してはいけない。数字 (検査値) で判断するのではなく、腹膜刺激症状という他覚的所見を信用すべきだ。自分の直観を大切にすべきだ」。まさに百戦錬磨の武將らしい言葉でした。現代は画像診断や検査値を優先して手術適応を判断する時代で

すが、他覚的所見を第一に考えて手術を決定すれば、手遅れになることはないと思います。それ以来、教室の後輩にもこの教訓を語り継いでいます。

〈自分で自分の道を開け〉

福井県立病院に着任して一年半がたとうとしていたある日、医局長から大学に戻るように言われました。何回かのやりとりがありました。大学に戻ると、医局紛争が解決したとは言え、教室では深刻な医師不足でした。当時の第一外科では医師達は心臓、胸部、消化器、小児外科、血管外科の患者をまぜこぜに受け持っていました。

私は毎日の業務に追われながらも、研究の必要性を痛切に感じていました。手術患者の容態が落ち着いた夜間に、自分の決めたテーマで動物実験を行いました。

第一外科を率いる岩喬教授は不整脈外科の世界的なリーダーでした。岩教授の座右の銘「学而不倦」が示すごとく、研究にも情熱を注いでおられました。ある日、岩教授が「わたしは心臓外科が専門で、君の分野と異なるから研究のアドバイスをできないかもしれない。自分で自分の道を聞きなさい。消化器外科を志す医師達に学位の指導をしてほしい」と言われました。私は大いに感激し、教室のためにいい研究をしようと思案しました。後に、多くの後輩達が消化器外科関連の学位を取得したのは私の大きな喜びです。岩教授からは指導者のあり方を教えられました。

このように、三人の恩師の教えが外科医師としての私の人生の道標となっています。今後も、恩師の教えを後輩に伝えることが私の使命だと思っています。

昔話をしよう いつしか医者之道へ

むとう小児科医院 武藤 一彦

昭和二十二年六月、神奈川県横須賀市にて出生。六十六歳であるが若く見られることが多々ある。患者もその親も若さがみなぎっている。若さは伝染するらしくその恩恵を蒙っていると勝手に信じている。父は、横浜にある米軍印刷局に勤めていたが、印刷局の開放日に父に連れられて仕事場を訪問した。機械室に入った時、その騒音の凄さに耳を覆った。父の声が大きいのは職業病だったのだ。昔は怒られているのではないかと錯覚したことがあった。その印刷局で、面白い光景を目撃した。昼休み、食事に外のテントに出たら、職員がビンに入った醤油を飲んでいたのである。それがコーラだった。

父は武藤家の三男であるが親と同居した。しつかり者の祖母には、長男の嫁も、次男の嫁もそりが合わず、数年も経たないうちに別居となった。母は、その単純さゆえに祖母には一番可愛がられたようだ。それでも嫁姑戦争は勃発した。些細な事から戦争は始まる。贅沢な物を買ってきたという姑の言葉に、母はシトシトと涙を流し、場所をわきまえずに言い争いが始まる。私はその場から去ることも出来ず、買ってきた柿をかじりながら、静かに涙を流す。人生は複雑である。私を愛してくれる二人の争いに、子どもの心は分裂し時限爆弾のように常に不安が伴う。戦争の終焉は、母と私が実家へ帰

ることである。一週間ほどすると父が迎えにくる。深夜のヒソヒソ話に、聞き耳を立てながら眠りにつく。翌朝、母と私は我が家への道をたどる。そんなことが何回繰り返されたことだろう。私は笑顔の少ない無口な悩み多き少年になっていた。

何時からかは定かではないが、右睾丸の横にさらに一つ、柔らかい腫瘍が育っているのに気づいた。何かの病気だろうと考えたが、どうして良いか分からず、不安は成長した。結局、場所が場所だけに誰にも相談することなく不安は更に巨大化した。家庭の問題のみならず身体への不安が影響したのか、エリートコースを歩いてきた中学生も、高校ではそうは行かず成績は下降の一端をたどった。あるテストで数学零点をとったが、それでも自分の実力を理解せず、志望していた四つの大学工学部を滑った。予備校の試験にも落ち、浪人が決まった時、母に病状を打ち明けた。かつての紅顔の美少年も、人生の試験に耐えかね、三個の睾丸を持つ暗い少年に成り下がった。母は、即座に外科医院の名前を告げた。昔から当家の外科の主治医である短髪の医師は、テキパキと仕事をこなす。看護師を遠ざけて私の下半身を見つめ、「いつから?」と聞きながら触診する。看護師に注射器を取りにいかせた。「どうなるんだ。」と思う間の早業である。医師は注射器に吸い取った、やや白濁した液体を見ながら「陰嚢水腫」と告げた。そして、「取ってしまえばおしまいだ。」とも。数日後、局所麻酔のみで手術は短時間で終了した。手術台の上にある柵を持っていた私の両手に婦長のお腹が押し付けられ、その温もりが、手術中の不安を癒してくれた。呆気なくも短時間の手術で心の一部を占めていた不安感が拭かれた。傷が癒えるまでの一週間の入院は、心身の疲れを癒す貴重な時間であった。人間の悩みが、医療という技術によって消えてしまう現実を身をもって体験した。人生の転機であった。医師という仕事も、将来の夢として急浮上した。

試験のない予備校の程度が低いわけではない。定員に満たないから試験をしなだけである。優秀な人材は、試験がなくとも集まる。その逆もある。横浜にあるY予備校は、数学零点であろうが受け入れてくれた。初めてのバツジのない生活に戸惑いながら、日々が過ぎる。現役時代、模擬試験が近くなると必ず下痢をしたが、それも思い出になった。少し心と体がたくましくなったのか?常に成績が張り出される〇〇一彦と△△一彦がいた。武藤一彦!お前は、いつデビューするのか。〇〇一彦とは、テストで隣りに座ったことから知り合いになった。昼休みの一時間は、彼との貴重な交流の時間になった。工学部志望の彼の人間性は、無口な私を雄弁にし、人生は人との出会いで楽しくなる事を教えてもらった。

おもむろに風呂敷を開き、黒板に数式を丁寧に書きながら決して慌てることなく、人生を語るが如くに数学を語る老教師と出会った。数学を理路整然と誰にでも理解できるように砕いて見せる。毎日の講義に惹きつけられ、数学の点数が上がる。数学とはこんなにも楽しい学問だったのだ。ある時、三人の一彦が壁紙を飾った。一回だけだったが込み上げるものがあつた。暗い毎日に光がさし、太陽

はまた昇る」という言葉に納得した。

高校時代の初恋に敗れ、北陸の鉛色の空が私の気持ちを誘った。試験前日、夜行列車に揺られながら寝不足のまま早朝の金沢駅に降り立った。町を当てもなく歩きながらいつしか兼六園のベンチに腰掛けていた。次第に身体は横になり、眠っていた。人生の転機とは、何だろう。人や物との出会いが、いや私の場合には三つ目の睾丸も医学部受験という転機のきっかけになったのだ。しかし本当に転機なのか。転機と考えるのは、間違っているのかもしれない。転機ではなくそれが私の人生の流れなのかもしれない。出会った家族を初め、多くの人たちとの交流の中で人生が作られて行くのだろう。その流れが私の人生であり、貴方の人生なのだ。予備校を落ちた事も、老教師に出会ったことも、〇〇一彦に出会ったこともすべてが私の人生を起伏あるものにしてくれた。悩みの中にある時は、逃げ出したと思うが、逃げたらどうだったのか。そちらが本当の私の人生だったのか。更に伴侶との出会いも人生の大きな出来事だ。それが幸いであれば、それに超したことはない。破局を迎えることもあるが、それも人生の流れの結果であれば仕方無い。

午睡から覚め、翌日から三日間の入学試験が待っていた。流れがどの方向を向いているのか。その時点でも、全く予想が付かなかった。私に医者への道を開いてくれた大いなる力は、老教師や睾丸事件、更には建築士という目標にまっしぐらに突き進んでいた〇〇一彦との出会いであったことは確かである。多くの出会いに改めて感謝いたします。

学生コーナー

いつでも夢を

医学類四年 北島 彩夏

同窓会報をご覧の皆さま、明けましておめでとうございます。門松は冥土の旅の一里塚と言う一休禅師の句もあります。が、せっかくなのでたい新春の候でありますので、若人らしく「夢」をテーマに書かせて頂きます。

誰でも、幼い頃に親や親戚、幼稚園の先生などに「大人になったら何になりたい?」「将来の夢はなあに?」と聞かれたことがあったと思います。読者の方は、昔抱いていた夢は何だったか、覚えておられるでしょうか。毎年小学生を対象に保険会社が行っている「大人になったらなりたいたいもの」の調査結果によると、昨

年は男児で「サッカー選手」、女児で「食べ物やさん」がそれぞれ一番人気の職業であったそうです。やはり、スポーツ選手や宇宙飛行士などの華やかな職業や、ケーキ屋さん、花屋さんなど子どもが思い浮かべやすい仕事が人気のようです。

私はと言うと、もちろんお医者さん：ではなく、「寿司職人」になって自分の店を持つこと」が夢でありました。もちろん、「寿司屋になれば好きなだけ毎日お寿司を食べられる!」という単純な動機でしたが。

当時の興味関心に合わせて、将来の夢はころころと変わりました。小学校に上がってからはアイドル歌手、漫画家、教育テレビのうたのおねえさんにもなりたいたと思っています。中学校では吹奏楽部に入部して部長を務めていたので、商

業高校で部活に打ち込んでから音大に進学してオーケストラ団員になるか、日本の初的女性総理大臣になって国を動かすのも良い、などと真剣に考えていました。こんな調子だったので、医師になることを考え始めたのは、大分後でありました。

両親はどちらかと言えば「好きなことをやれ」という教育方針で育ててくれましたが、私が医学部受験を決めた時は内心ほっとしていたのではないかと、思えます。周りの人々の支援のおかげで、無事に医学部に入学し四年生にまでなり、かつての「夢」は数年後に実現しようとしています。

さて、世の歌謡曲、流行歌が夢を持ち続けよう、希望を捨てないでと歌うように、大人になっても夢を持つことは大切であるようです。しかし、「こういう職業に就きたい」という夢が近い将来叶わんとする今、私は新たにどんな夢・目標を持つべきなのでしょう。また、ある程度人生の道筋が見えてきた時点でも、夢や目標とは持ち続けても良いものなのでしょうか。

冒頭に出した夢調査は小学生が対象でしたが、大人を対象とした「もし別の人生を歩めるとしたら何になりたいか」という調査も併せて行われていました。人気の職業は男性では一位が「医師」、二位が「野球選手」、三位が「学者・博士」、女性では一位が「看護師」、二位が「医師」、三位が「保育園・幼稚園の先生」となっ

ています。子供たちが憧れる職業もちららんランキングしていますが、「お金持ち」「公務員」と言った現実的な回答も目立ちます。ちなみに、「現状で満足である」とする回答は男性で二十一位、女性で十七位となっていました。

この調査結果にも表れているように、大人が持つ夢は子どものそれに比べて現実味を帯びています。グーグル検索で「社会人 夢 目標」と入れてみますと、「マイホームを建てたい」「出世したい」「温かい家庭を持ちたい」等が見受けられます。子どもが持つ夢が□□になリたい」というフォーマツトなのに対し、何かに「なった」存在である大人は「○○をやりとげたい」「△△が欲しい」というより実現に近い形の夢、目標を持つようです。

ですが、ニュース等で同世代の就職活動の厳しさを聞くに、自分の希望の者に「なれる」人は多くないように思います。仮に希望の職種に就いたとしても、日々の生活に倦み、夢や目標を見失う人々も少なからずいるようです。世の流行歌が夢を忘れるな、希望を捨てると繰り返し返すのは、実際には夢を持ち続けることができないう大衆の、理想の反映ではないかという穿った見方もできます。

かのマッカーサー元帥が座右の銘としていたという、米国の詩人サミュエル・ウルマンの「青春の詩(原題: Youth)」という詩をご存知でしょうか。

「青春とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てて冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。年を重ね

ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。」これがこの詩の冒頭です。ウェブ上で手軽に全文を見ることができると、ぜひ一度全文を読んでみて欲しいと思います。

大学に入学すると、それまでにお付き合いをしたことがないような年代の方、立場の方に出会うようになりました。その中でも、「この人は素敵な生き方をしている」「魅力的だ」と感じる方は、たとえ何十歳も年上の先生であっても、みずみずしい好奇心を持って目の前の仕事に取り組み、なお研鑽を重ねておられます。彼らの仕事は洗練されていて、また仕事に対する美学・情熱をも感じさせます。「青春の詩」にもありますが、人間として人を引き付ける魅力とは、理想を追い求め努力を続けるその姿勢、すなわち若さなのではないでしょうか。

この春からは、いよいよ病棟実習がスタートし、患者さんと実際に会い、生の医療の現場を体験することになります。同級生の友人たちも、研修先の病院や将来どの科に進むかについて考え始めているようです。長年情熱を傾け続けられるような選択をする為に、この一年はしっかり実習に取り組み、臨床の現場の人々の仕事を見つめたい、と思っています。

ちなみに本原稿のタイトルは、橋幸夫さん・吉永小百合さんの曲より取らせて頂きました。昨年大ヒットした某連続ドラマの挿入歌として聴くまで聴いたことがなかったのですが、名曲です。苦難の中でも、いつでも夢を持ち続けられる人生を歩みたいと思います。

教授退職記念講演会・ 記念式のお報せ

謹 啓 時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます

さて 左記五名の教授方が平成二十六年三月三十一日
で御退職されるに際しまして その御高德と御功績
に対し感謝の意を表したいと存じまして退職記念会を
発足させ 下記のとおり記念講演会並びに記念式を
挙行することになりました
つきましては 御多用のところ誠に恐縮ですが 記
念講演会での御講演並びに記念式への御臨席を賜りま
すようお願い申し上げます

謹 白

平成二十五年十二月吉日

中沼安二教授・加藤 聖教授・
山本 健教授・宮本謙一教授・
小泉順二教授退職記念会

実行委員長 山本 博

一・記念講演会 記

日 時 平成二十六年三月一日(土)
午後二時三十分から
場 所 医学部十全講堂 ホール
演 題 「胆管・胆道の病理」

中沼 安二 教授

「サカナから学ぶラット視神経の再生」
加藤 聖 教授

「麻酔ひと筋 四十年」
山本 健 教授

「根拠に基づく薬物療法のために」
宮本 謙一 教授

「総合診療について」私のふりかえり」
小泉 順二 教授

二・記念式

日 時 平成二十六年三月一日(土)
午後五時から
場 所 附属病院 宝ホール
(記念品贈呈、挨拶、パティ等)

編集後記

新年おめでとつございます。会報第
百五十六号は、同窓会員ならびに本学教
員のご活躍を数多く掲載する一方で、廣
根孝衛名誉教授、田中重徳名誉教授、濱
田潤一郎教授のご逝去を報じています。
就中濱田教授は現職在任中のご逝去であ
り、共に患者の治療に当たってきた者に
とって痛恨の極みです。山本博医学系長
の声涙俱に下る追悼文に慟哭し、故濱田
教授のご冥福を祈ります。

十全同窓会と宝町キャンパスにとって
新春の明るい話題は、医学部記念館の改
修・整備とプロムナード整備の概算要求
が、平成二十五年政府補正予算案に組
み込まれて閣議を通り、国会審議を待つ
段階に至ったことです。これで医学部創
立百五十周年記念事業は有終の美を飾る
ことができます。中村信一学長始め関係
各位のご尽力に心からの御礼を申し上げ
ると共に、十全同窓会会員各位から賜り
ましたご支援に篤く御礼申し上げます。

私が現役の会報編集委員として編集後
記を書かせていただくのは、これが最後
です。顧みますと平成二十年から二十四
年まで会報編集委員長を務めさせていた
だき、会報第百五十号記念座談会の司会
を務めさせていただいたという、得がたい
体験をさせていただきました。また、学
生の声を会報に反映する目的で「学生
コーナー」を新たに企画し、医学類四年
生の有志に自由に意見を述べて貰ってい
ます。これまでは優等生の意見が多いの
ですが、型破りな学生の出現を楽しみに
しています。さらに「十全昔話」は、先
輩諸氏の貴重な体験談を後世に残す企画
としてスタートしました。味わい深いお
原稿をお寄せ下さった皆さまに、心から
感謝申し上げます。(山本 健 記)

金沢大学医学部十全同窓会 会報編集委員のご紹介

学内編集委員は、中村信一、加藤聖、山本健、山本博、山岸正和、太田哲生、
大島徹(編集委員長)、中村裕之、和田隆志、佐々木素子、若山友彦、中西清
香の十二名。

学外編集委員は寺畑喜朔、山口成良、柿下正雄、津川龍三、興村哲郎、多留
淳文、赤祖父一知、佐藤保、三輪晃一、橋本琢磨、勝田省吾、大村健二、横山仁、
横山修、常山幸一、中本安成の十六名。
以上二十八名で構成されています。

